

現代
中等日本文法

八波剛吉著

上級用

東京 大坂
英進社發行

教科書文庫
4
815
41-1937
2000064973



41832

教科書文庫

4
815
41-1937
20000
64973

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

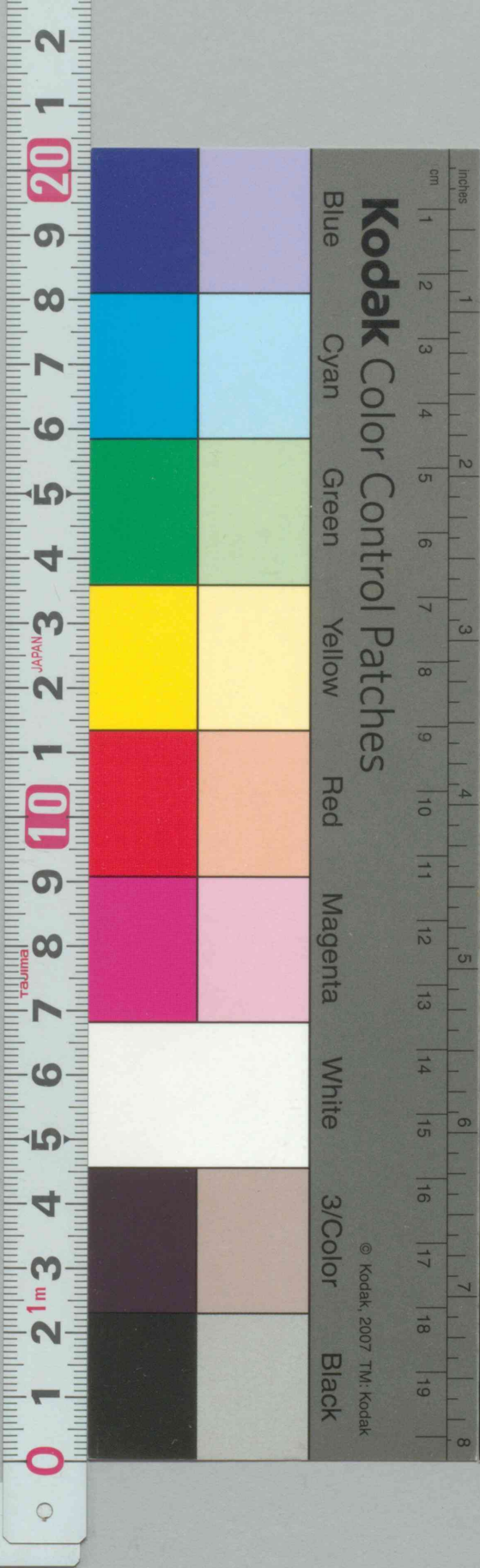


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



日九十二月十年二十和昭
濟定檢省部文
用科文漢語國・校學中

教科書文庫
4
815
41-1937
2000064973

資 料 室

375.9
Y 20

現代
波則吉著
中等日本文法

東京
大阪
英進社發行

広島大学図書
2000064973

広島大学
教
64973
書

一本書は昭和十二年三月二十七日改正の教授要目に準據し、中學校上級用の國文法教科書として、既習の文法的事項を整理し文語法の大要を授ける爲に編纂したものである。

一初學年用との聯繫に注意し、相俟つて國文法についての確實な知識を得させるやうにとつとめ、特に助動詞助詞の説明には細心の注意を拂つて學習を容易ならしめるやうにした。

一文章法は平易簡明にして、その大要を會得せしめるに努めた。

一反復練習は文法教授上最も有効なることを考へ、各章とも練習題を豊富にし、中學校用國語讀本その他各方面から興味あるものを探擇した。

一附録として「國語變遷の沿革概要」を掲げ、用言及び助詞を主としてその變遷の過程を説述し、國語に對する學習的興味を喚起した。

代現
中等日本文法 上級用

目次

品詞	一
第一章 名詞・數詞・代名詞	四
第二章 動詞	一〇
一 活用形	一〇
二 文語動詞の活用の種類	一五
三 文語動詞の活用の種類の見分け方	二四
四 語尾の紛れ易い文語動詞	二六

目次

五 十 音 圖

ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	
行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	
わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ	ア段
る	り	い	み	ひ	に	ち	し	き	い	イ段
う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	ウ段
ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	エ段
を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お	オ段

第三章 形容詞附形容動詞……………三四

一 文語形容詞の活用……………三四

二 文語形容動詞の活用……………三五

第四章 音 便……………三六

第五章 助 動 詞……………三六

一 文語助動詞の種類と活用……………三七

二 助動詞の用法……………三七

第六章 副 詞……………三九

第七章 接 續 詞……………三九

第八章 文語助詞の用法……………四〇

第九章 感 動 詞……………四〇

第十章 紛れ易い文語品詞……………四一

文

第一章 文の成分……………四二

第二章 文の成分の位置及び省略……………四三

第三章 節……………四四

第四章 文の種類……………四七

附 録

國語變遷の沿革概要……………一

文法上許容スベキ事項……………二六

附 表

動詞の活用表
 形容詞の活用表
 助動詞の活用表
 動詞と助動詞との接續表

目次終

現代中等日本文法 上級用

品詞

單語

品詞

一 天に二日なく地に二王なし。
 二 野にも山にも櫻の花が美しく咲いてゐる。

右の例の(一)は文語で八つの言葉の單位に分れ、(二)は口語で十四の言葉の單位に分れる。かやうに、文法上言葉の單位として取扱はれるものを單語といふ。

○以下、範例並に練習題には、口語に限って(口)のしるしを附ける。

單語は、その意義や、形態や、職能によつて、次の十種に分たれ、その各を品詞といふ。

品詞

名詞 數詞 代名詞 動詞 形容詞 助動詞 副詞

接續詞 助詞 感動詞

體言
用言

十品詞のうち、名詞・數詞・代名詞は事物の本體をあらはすものであるから、これを總稱して體言といひ、動詞・形容詞・助動詞は事物の作用をあらはすものであるから、これを用言といふ。

三 さ夜ふけて、ほの暗きみあかしの影ものさびし。

四 風采は頗るけ高いが、身體がどことなく弱く見える。(口)

右の例の傍線を施した語のやうに、單語として獨立しないで或語の上に添へて用ひられるものを接頭語といふ。

五 やう／＼春めきて草木も芽ぐみ、小鳥もたのしげにさへづる。

六 皆さん、どうか男らしい態度で活躍して下さい。(口)

右の例の傍線を施した語のやうに、單語として獨立しないで或語

接頭語

接尾語

の下に添へて用ひられるものを接尾語といふ。
接頭語又は接尾語の附いて出來た語は、これを合せて一品詞とする。

練習

次の文から接頭語・接尾語を選び出しなさい。

〔例〕 お隣接頭の正雄君接尾も私達接尾といつしよに行くことになつてゐます。(口)

一 み山の奥の杣人接尾もわが大君の大御代をことほぎまつる。

二 同じ自然の御母の、御手に育ちし姉と妹、み空の花を星といひ、わが世の星を花といふ。

三 屋根の上に霜がまつ白だ。庭の菊も白い花びらに赤みがさして來た。霜にあたつたからだらう。(口)

四 人げもない道を小一里も歩いた頃、眞夜中のうすら寒い風は木木

に囁ささやき、谷川の音は耳許近く聞え、あたりは愈々物凄くなつて來た。
(口)

第一章 名詞・數詞・代名詞

一 「大原や蝶の出で舞ふおぼろ朧月」この句を芭蕉が見て、「實に秀逸だ。」と言つた。(口)

固有名詞
普通名詞
名詞の複數

右の例の、大原・芭蕉のやうな地名・人名は、その地・その人に限つた名で、他の地・他の人には通用しない。このやうな名詞を固有名詞といひ、これに對して蝶・朧月・句・秀逸のやうに、同じ種類のいづれの事物にも用ひられる名詞を普通名詞といふ。

○名詞の複數をあらはすには、人々・國々・所々・隅々ところどころのやうに同じ語を重ねるものと、諸人・諸國・衆・説・數・時間もろびとのやうに接頭語を冠らせるものと、親たち・子供ら・私ども・先生がたのやうに接尾語を添へるものがある。

量數詞
序數詞
人代名詞
自稱
對稱

二 九月十三夜の月隈もなかりければ、兄弟二人庭に出でて遊びけり。
三 一千メートルの競走で、永野君は第一着となつたので一等賞を得た。(口)

右の例の、二人・一千メートルのやうに事物の數量をあらはす單語を量數詞といひ、九月十三夜・第一着・一等賞のやうに事物の順序をあらはす單語を序數詞といふ。

四 我、汝と共に彼を訪ねん。
五 あなたはどなたですか。(口)

右の例の傍線を施した語のやうに、人の名の代りに用ひられる代名詞を人代名詞といふ。

人代名詞のうち、話す人自らの名の代りに用ひるのを自稱(または第一人稱)といひ、相手の名の代りに用ひるのを對稱(または第二人稱)

他稱
不定稱

といひ、自分でも對手でもない外の人の名の代りに用ひるのを他稱(または第三人稱)といひ、不明又は不定の人の名の代りに用ひるのを不定稱といふ。

自稱	對稱	他稱	不定稱
わ、われ	な、なんぢ	か、かれ	た、たれ
おの、おのれ	あなた(口)	あ、あれ(口)	だれ(口)

○この外、自稱にわたくし、自分僕、小生など、對稱に君、おまへなど、他稱にあのかた、不定稱にどなたなどその類が甚だ多い。

- 六 これとそれといづれかまされる。
- 七 叔父さん、ここはどこですか。(口)
- 八 山のすその方があちら。こちら白いのは、蕎麥そばの花であら

物代名詞
近稱
中稱
遠稱
不定稱

う。(口)

右の例の傍線を施した語のやうに、事物・場所・方向の名の代りに用ひられる代名詞を物代名詞といふ。

物代名詞のうち、自分に近いものを指すのを近稱といひ、稍離れたものを指すのを中稱といひ、遠いものを指すのを遠稱といひ、不明又は不定のものを指すのを不定稱といふ。

物代名詞のおもなものを表示すれば次のやうである。

近稱	中稱	遠稱	不定稱
こ、これ	そ、それ	か、かれ	いづれ
ここ	そこ	あ、あれ(口)	なに
		あそこ(口)	ど、どれ(口)
		かしこ	いづこ
		いづく	どこ(口)

代名詞の複數

向	方		
こち	こち	そち	あち
こなた	そなた	あなた	いづち
こつち(口)	そつち(口)	かなた	いづかた
こちら(口)	そちら(口)	あつち(口)	どつち(口)
		あちら(口)	どちら(口)

○代名詞の複數をあらはすには、われわれになにのやうに同じ語を重ねるものと、諸君のやうに接頭語を冠らせるものと、われら君たちあなたがた私どものやうに接尾語を添へるものがある。

練習

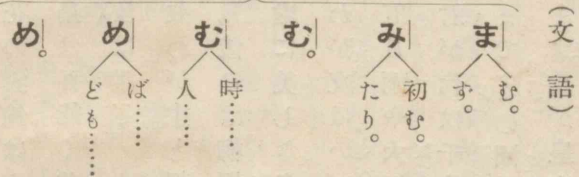
次の文から名詞・數詞・代名詞を選び出してその種類を述べなさい。

〔例〕 貫之等古今集二十卷を選び奉りて、その身死したらん後、敷島の道永く榮えんことを喜び。

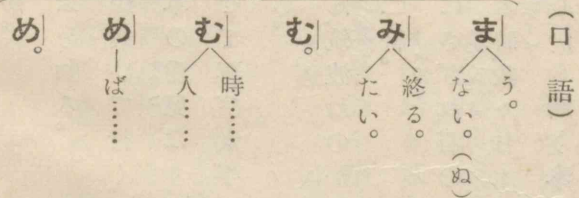
- 一 花の雲、鐘は上野か淺草か。
- 二 鳥は吾能く其の高く飛ぶを知る。
- 三 「汝は誰ぞ。そを何處にか負ひて行く。」聞召せ、背負ひまつるは、奴わが主と頼む乃木將軍の愛兒なり。
- 四 見渡せば柳櫻をこきまぜて再び太平の世にあへる春は、此處に彼處に美しき色ぞ多かりし。
- 五 わが友はいづち行きけん、筑波ねのかなたこなたに求めかねつも。
- 六 五月雨や大河を前に家二軒。
- 七 「君が代は千代に八千代にさざれ石のいはほとなりてこけのむすまで、この國歌を奉唱する時、我々日本人は、思はず襟を正して、榮えます。我が皇室の萬歳を心から祈り奉る。此の國歌に歌はれてゐる言葉こそ、我が尊い國語である。(口)

第二章 動詞 一活用形

書を讀



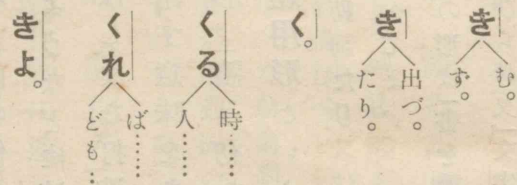
書を讀



- | | | | | | |
|---------|---------------------|---------|---------|---------|---------|
| (六) 命令形 | (五) 已然形
(口語) 假定形 | (四) 連體形 | (三) 終止形 | (二) 連用形 | (一) 未然形 |
|---------|---------------------|---------|---------|---------|---------|

語幹 語尾 活用形

早く起



早く起



- | | | | | | |
|---------|---------------------|---------|---------|---------|---------|
| (六) 命令形 | (五) 已然形
(口語) 假定形 | (四) 連體形 | (三) 終止形 | (二) 連用形 | (一) 未然形 |
|---------|---------------------|---------|---------|---------|---------|

右の例のやうに、動詞にはその語形の變化しない部分即ち語幹と、變化する部分即ち語尾とがあり、その變化即ち活用は五十音圖の同一行内において行はれる。活用のおのゝの形を活用形といふ。活用形には右に擧げたや

うに未然形・連用形・終止形・連體形・已然形(口語では假定形・命令形の六種がある。

○この名稱は、それ／＼その用ひ方の一部について便宜上名づけたもので、各形の用ひ方が、これに盡きてゐるのではない。

未然形

●未然形 前の例の讀ま・起きのやうに、未來又は推量の助動詞む(ん)・う・ようなどに連なつて、まだ事實がさうなつてゐない意味をあらはし、また打消の助動詞ず・ない(又はぬ)などに連なつて、物事を打消す意味をあらはす形を未然形といふ。

連用形

●連用形 「讀み初む」・「起きた」の讀み・起きのやうに用言に連なる形を連用形といふ。

○助動詞たり又は助詞てを添へることの出来る形は、すべて連用形と考へてよい。

○この形は「書を読み、字を書く」のやうに一旦語句を中止する場合にも用ひられ、又「文字の讀みをならふ」のやうにそのままで名詞となるこ

終止形

ともある。

●終止形 「讀む・起く」・「文・起きる」(口)は文が終る場合に用ひられる形で、これを終止形といふ。

○「書を読みべし」・「悔ゆとも及ばじ」の讀む・悔ゆは終止形であるが、終止しないので助動詞のべし、助詞のともは連なつてゐる。

○終止形は動詞の本體であるから、動詞を擧げる時には常にこの形を示すのである。

連體形

●連體形 「讀む人」・「起くる時」・「文・起きる時」(口)の讀む・起くる・起きるやうに、體言に連なる形を連體形といふ。

○係に「ぞなむ」・「やか」があれば、連體形を以て結ぶ。

已然形
假定形(口)

●已然形 「讀めども」・「起くれれば」の讀め・起くれのやうに、事實がすでにさうなつてゐる意味をあらはす形を已然形といふ。

○係に「こそ」があれば、已然形を以て結ぶ。

○口語では「手紙を讀めば」様子が知れよう。「明朝五時に起きれば」一番

命令形

列車の間に合ふだらう。のやうに、物事を假定していふ形となるから、これを假定形と名づける。

命令形 読め・起きよのやうに、命令の意味をあらはす形を命令形といふ。

練習

次の文から動詞を選び出し、その活用形を述べなさい。

[例] ころよく我にはたらく仕事あれ、それを仕遂げて死なむとぞ思ふ。

- 一 拜殿の前に進みて整列し、謹みて拜し奉る。
- 二 時に歸りて故郷を訪へ。舊知の山川、君を迎へて往時を語らん。
- 三 汝若し成功を望まば、天の與へたる汝の長所に就け。
- 四 をりくにあそふいとまはある人のいとまなしとてふみよまぬ

かな。

- 五 紅の二尺のびたるばらの芽のはりやはらかに春雨のふる。
- 六 幾匹とも知れぬ鳥が、裏の森で騒ぎたててゐる。(口)

二 文語動詞の活用の種類

動詞の活用は口語では四段・上一段・下一段・カ行變格・サ行變格の五種であるが、文語では四段・上一段・上二段・下一段・下二段・カ行變格・サ行變格・ナ行變格・ラ行變格の九種がある。

四段活用

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
行	か	き	く	く	け	け
ア段	イ段	ウ	段	エ	段	

右の例のやうに、五十音圖のアイウエの四段に活用するものを四

段活用の動詞といふ。

○あらゆる動詞のうちで、この活用に属するものが最も多い。

上二段活用

上二段活用

	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
イ	(着)	き	き	きる	きる	きれ	きよ
段							

右の例のやうに、五十音圖のイの一段だけに活用するものを上二段活用の動詞といふ。

○この活用に属する文語動詞は次の十數語ぐらゐるもので、語幹と語尾とを別つことの出来ないものが多い。

- マ行 見る。(惟みる。顧みる。鑑みる。試みる)
- ヤ行 射る。鑄る。
- ワ行 居る。率る。用る。
- カ行 着る。
- ナ行 煮る。似る。
- ハ行 乾る。簸る。

上二段活用

上二段活用

○右のうち試みる用ゐるは、現代文では試む用ふと上二段活用の動詞として活用することが多い。

	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
イ	起	き	き	く	くる	くれ	きよ
段							

右の例のやうに、五十音圖のイウの二段に活用するものを上二段活用の動詞といふ。

○上二段活用の動詞は、口語では上一段活用となる。

○忍ぶ恨むは上二段活用の動詞であるが、現代文では四段活用として

下二段活用

④ 下一段活用

も用ひられる。

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(蹴 ^け)	け	け	ける	ける	けれ	けよ
エ						段

右の例のやうに、五十音圖のエの一段だけに活用するものを下一段活用の動詞といふ。

下一段活用に屬する動詞は蹴るの一語だけである。

○この活用も語幹と語尾とを別つことが出来ない。

○口語では、「けりに蹴速^{けはや}を蹴たふしました」といふやうに、ラ行四段に活用させることもある。

下二段活用

⑤ 下二段活用

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
受	け	け	く	くる	くれ	けよ
エ		段	ウ		段	エ

右の例のやうに、五十音圖のウエの二段に活用するものを下二段活用の動詞といふ。

○下二段活用の動詞は、口語では下一段活用となる。

○この活用に屬する動詞は、四段活用の動詞についてその数が多い。

○ア行下二段活用の動詞得はその語全體が變化して語幹と語尾とを別つことが出来ない。

⑥ カ行變格活用

カ行變格活用

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(來 ^く)	こ	き	く	くる	くれ	こよ
オ	イ	ウ			段	オ

右の例のやうに、こきくくるくれこよと五十音圖のイウオの三段に活用するものをカ行變格活用の動詞といふ。
カ行變格活用に屬する動詞は來の一語だけである。

○カ行變格活用の動詞は口語でもカ行變格活用であるが、終止形と命令形とが文語の活用と異なる。

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
(來)	こ	き	くる	くる	くれ	こい

サ行變格活用

セ サ行變格活用

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(爲)	せ	し	す	する	すれ	せよ
エ段	イ段	ウ	段	エ段		

右の例のやうに、せしすするすれせよと五十音圖のイウエの三段

に活用するものをサ行變格活用の動詞といふ。
サ行變格活用に屬する動詞は爲の一語だけである。

○爲は名詞形容詞または副詞と結びついて、やはりサ行變格活用の動詞となることが多い。

心 <small>こころ</small>	勉強 <small>べんきやう</small>	全 <small>まこと</small>	明 <small>あきら</small>	信 <small>しん</small>	重 <small>おも</small>	先 <small>ま</small>
に	に	に	に	に	に	に
す	す	す	す	す	す	す
語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
心	勉強	全	明	信	重	先
に	に	に	に	に	に	に
す	す	す	す	す	す	す
する	する	する	する	する	する	する
すれ	すれ	すれ	すれ	すれ	すれ	すれ
せよ	せよ	せよ	せよ	せよ	せよ	せよ

○サ行變格活用の動詞は口語でもサ行變格活用であるが、未然形と終止形と命令形とが文語の活用と異なる。

ナ行變格活用

㊦ ナ行變格活用

○「勉強しよう」「明かにしよう」など口語ナ行變格活用の未然形が未來又は推量の助動詞ようにつゞく時にはしようであるが「使命を完うして歸るでせう」「仰に従ひませう」のでせうませうは、指定の助動詞です尊敬の助動詞ますの未然形に未來又は推量の助動詞うの添うたものであるから、紛れないやうにしなければならぬ。

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
(爲)	し [○] せ	し	する [○]	する	すれ	し [○] せよ

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
ア段	イ段	ウ	段	エ段		

右の例のやうに、なにぬぬるぬれねと五十音圖のア・イ・ウ・エの四段

ラ行變格活用

㊦ ラ行變格活用

に活用し、連體形と已然形とが四段活用と異なるものをナ行變格活用の動詞といふ。
 ナ行變格活用に屬する動詞は死ぬ・往ぬの二語だけである。
 ○ナ行變格活用の動詞は、口語では四段活用となる。

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
有	ら	り	り	る	れ	れ
ア段	イ段	ウ	エ	段		

右の例のやうに、らりりるれと五十音圖のア・イ・ウ・エの四段に活用し、終止形が四段活用と異なるものをラ行變格活用の動詞といふ。
 ラ行變格活用に屬する動詞は有り・居り・侍りの三語だけである。

○ラ行變格活用の動詞は、口語では四段活用となる。
次に文語動詞と口語動詞との活用を比較して掲げる。

文語動詞 (九種)		口語動詞 (五種)	
四段活用	ラ行變格活用	四段活用	
ナ行變格活用			
上一段活用		上一段活用	
上二段活用			
下一段活用		下一段活用	
下二段活用			
カ行變格活用		カ行變格活用	
サ行變格活用		サ行變格活用	

三 文語動詞の活用の種類の見分け方

まづ上一段活用・下一段活用及び變格活用に屬する語は、その數

が少いからすべて記憶する。

上一段活用

着る 煮る 似る 乾る 籤る 見る 射る
鑄る 居る 率る 用る

下一段活用

蹴る

カ行變格活用

來

サ行變格活用

爲

ナ行變格活用

死ぬ

ラ行變格活用

有り

往ぬ

侍り

次に、その動詞に「ず」又は「ん」を連ねて見て、

(一) ア段から續くものは四段活用

〔例〕 聞か(ア)ず。 學ば(ア)ん。

(二) イ段から續くものは上二段活用

〔例〕 起き(イ)ず。 悔い(イ)ん。

(三) エ段から續くものは下二段活用

○口語動詞の活用を見分けるには、まづ語數の少いものは記憶する。

カ行變格活用 来る。
サ行變格活用 爲る。

次に、その動詞に「ない」又は「ぬ」を連ねて見て、

(一) ア段から續くものは四段活用

〔例〕 聞か(ア)ない。 學ば(ア)ぬ。

(二) イ段から續くものは上一段活用

〔例〕 起き(イ)ない。 悔い(イ)ぬ。

(三) エ段から續くものは下一段活用

〔例〕 受け(エ)ない。 棄て(エ)ぬ。

練習

(一) 次の動詞の活用を述べなさい。

〔例〕 濟す 正しうす

幹	未	用	終	體	已	命
濟	さ	し	す	す	せ	せ
正しう	せ	し	す	する	すれ	せよ
				サ變		サ四

(二) 次の文から動詞を選び出し、その活用の種類を述べなさい。

〔例〕 ひとり燈火のもとにふみをひろげて見ぬ世の人を友

とするサ變こそよなうなぐさむマ四わざなれ。

一 眼を閉ぢて遠く古を顧みれば、綿々の情盡くることなし。

二 思ひてこゝに至れば、青年よろしく努力すべきなり。

三 溪に沿ひて進めば、山高く聳え、水清く流れて、塵外の趣あり。枝に

一 買ひて。 老いて。 率ゐて。
 二 買ふ。 据う。 報ゆ。
 三 堪へず。 生えず。 植ゑず。
 四 閉づ。 交ず。
 五 遠い山々へはまだ雪の來ることがあり、雨でも降れば裕では寒いこともある。(口)
 六 敵の兵士は一方に血路を求めて逃げようとした。(口)

四 語尾の紛れ易い文語動詞

右の例のやうに、動詞の語尾には、發音が同じやうで假名の違ふの

がある。今これを五十音圖の各行にあてると次のやうな關係になる。

ダ行	ザ行	ワ行	ヤ行	ハ行	ア行
だ	ざ	わ	や	は	あ
ぢ	じ	ゐ ← い		ひ ← い	
づ	ず	う ゆ ぶ う			
で	ぜ	ゑ ← え		へ ← え	
ど	ぞ	を	よ	ほ	お

一 ア行・ヤ行・ウ行に活用する動詞

右に挙げたものの外は、大抵ハ行に活用する動詞である。
● ザ行に活用する動詞

ワ行		ヤ行										ア行		
下二段	上一段	下二段										上一段	下二段	
植う。	居る。	悶 <small>も</small> ゆ。	見 <small>み</small> ゆ。	映 <small>か</small> ゆ。	費 <small>た</small> ゆ。	榮 <small>さ</small> ゆ。	消 <small>く</small> ゆ。	甘 <small>あ</small> ゆ。	老 <small>お</small> ゆ。	射 <small>や</small> る。	得 <small>う</small> 。			
飢う。	率 <small>ひ</small> る。	見 <small>み</small> ゆ。	冷 <small>ひ</small> ゆ。	潰 <small>つぶ</small> ゆ。	牙 <small>か</small> ゆ。	肥 <small>こ</small> ゆ。	癒 <small>い</small> ゆ。	悔 <small>く</small> ゆ。	鑄 <small>く</small> る。					
据う。	用 <small>も</small> る。	燃 <small>も</small> ゆ。	殖 <small>は</small> ゆ。	煮 <small>に</small> ゆ。	聳 <small>そ</small> ゆ。	越 <small>こ</small> ゆ。	覺 <small>お</small> ゆ。	報 <small>は</small> ゆ。						
		崩 <small>く</small> ゆ。	吼 <small>こ</small> ゆ。	生 <small>は</small> ゆ。	絶 <small>た</small> ゆ。	凍 <small>こ</small> ゆ。	聞 <small>き</small> ゆ。							
ゑ	ゐ	え										い	い	え
														(連用形)

右に挙げたもの、外は、ダ行に活用する動詞である。

○ 以上はすべて文語動詞について述べたのであるが、口語動詞もこれによつて類推することが出来る。例へば文語の覺おゆがヤ行下二段であることがわかれば、口語では下一段であるから覺おえるとなり、文語の据たうがワ行下二段であることがわかれば、口語では下一段であるから、据たゑるとなることがわかる。

練習

(一) 次の動詞の文語活用形を平假名で、口語活用形を片假名で記しなさい。

例 植 得

得		植		幹
口	文	口	文	口語 文語
エ	え	エ	ゑ	未
エ	え	エ	ゑ	用
エル	う	エル	う	終
エル	うる	エル	うる	體
エレ	うれ	エレ	うれ	假
エヨ	えよ	エヨ	ゑよ	已 命

論 酬 卒 榮 肯 詣 添 愧
 綻 貫 超 葬 倒 候

(二) 次の文に誤があれば、その理由を述べて訂正しなさい。

- 〔例〕 老ひて後若き日の怠惰を悔みて徒に死ぬものすくな
(イ) 行上二) める(ナ變、連體)
 からざるは眞に寒心に堪えざるなり。
(ハ) 行下二)
- 一 飢へ且凍へたる者は衣食を選ぶに違あらず。

- 二 月霜の如く牙へ、木枯、海の如く空に吼ふる夜は、人籟すべて絶へて、直に至上の聲を聞く心地す。
- 三 人如何に笑うとも、自ら守るところ堅く、行道に違わざらむには、何の恥ずる事かこれあらん。
- 四 教ゆれども覺へず。
- 五 反省することを解す者は、事に觸れる毎にその智進み、然らざる者は生來才智ありとも、終に小才子となり果つべし。
- 六 さうなればかうしやうと考える。(口)
- 七 論文を書こうと思う。(口)
- 八 惡が榮へ善が衰えるやうな社會であつてはならない。正義と人道とが絶へず人々の反省を促し、善いもの正しいものが常に幸福であるやうな社會でありたい。悔ひることなく恥じることなき生活は聖人より外にあり得るとは思えぬ。故に先づ人々の反省悔過といふことから善い社會は生れて來るのだ。(口)

第三章 形容詞附形容動詞

形容詞の活用

一 文語形容詞の活用

種類	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
ク活用	善	く	く	し	き	けれ
シク活用	美	しく	しく	し	しき	しけれ

○シク活用の終止形を「悪しし」「勇ましし」などのやうに用ひる習慣のあるものは、しを重ねてもよい。

○形容詞の連用形は、「山高く聳ゆ」「雨烈しく降る」のやうに副詞の用をなすことが多い。又、「夏は暑く、冬は寒し」のやうに語句を中止し、「遠くへ旅立つ」のやうにそのまゝで名詞となることもある。

○形容詞の連體形は、「善きを取り、悪しきを捨て」のやうに、下に來る體

言を省略することがある。

○ク活用に屬するものの中には、「静けし」「明けし」「さやけし」「のどけし」のやうに、已然形を缺いてゐるものがある。

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
静け	く	く	し	き	○

○口語形容詞は次のやうに活用する。

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形
善		く	い	い	けれ
美		しく	しい	しい	しけれ

○口語形容詞の連用形が副詞の用をなす場合に、關西では、「大變暑うなつた」「早うお歸り」のやうに長音を|を用ひるが、關東ではもとのまゝ暑く早くを用ひる。關東の用ひ方によるがよい。但し、關東でも「ございます」につゞく場合は、「大變暑うございます」「お早うございます」。

のやうに長音^リを用ひる。

練習

次の文から形容詞を選び出し、その活用形を述べなさい。

〔例〕 蟻は明暮シク活、連用にいそがしく、世の營に隙ク活、連體なき人に似たり。

- 一 品物多くして、之を望む者少ければ、其の物の價安くなり、品物少くして之を望む者多ければ、其の物の價高くなる。
- 二 何となく物うれしくもあるものは、起きいづる朝の心なりけり。
- 三 天高くして鳥の飛ぶに任せ、海闊くして魚の躍るに従ふ。
- 四 庭に敷きつめたむしろの上に、黄色い麥の穂が一面に廣げられて、まぶしいやうな夏の日にかゞやいてゐる。(口)

二 文語形容動詞の活用

善 明かにく。 洋々と。	善 明かな 洋々た	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
あり			ら	り	り	る	れ	れ

右の例のやうに、形容詞の連用形と、にまたはとで終る副詞とは、動詞ありに結びついてラ行變格活用の動詞と同様に活用する。これらの語は意味は形容詞的であり、活用は動詞的である所から、これを形容動詞と名づけ、形容詞の一種とする。

○形容動詞が語句の中止をあらはす場合は、次の例のやうにありを省略することが多い。

- 月明かに(して)星稀なり。
- 歩武堂々と(して)進軍せり。

○口語形容動詞は、

今日の會合の出席者は定めし多からうと思つてゐたのに、案外少かつた。

風は静かで、波は穏かです。

のやうに用ひられるが、完全な活用形はない。

練習

次の文から形容詞と形容動詞とを選び出して、その活用形を述べなさい。

例

憂形動、連用かりしこともつらかりしことも、時を過ぎてはたゞなつかしき思ひ出として残るのみ。
シク活、連體

一 源實朝、故大將の跡をうけつぎて、つかさ位滞る事なくよろづ心のままなり。建保元年二月廿七日正二位せしは、閑院の内裏つくれる賞とぞ聞き侍りし。同じき六年權大納言になりて左大將をかねたり。左馬のかみをさへぞつけられける。その年やがて内大

臣になりても、なほ大將もとのままなり。父にもやや立ちまさりていみじかりき。この大臣は大方心ばえもうるはしく、猛くもやさしくもよろづめやすければ、ことわりにも過ぎて武士の靡き従ふさまも父にも越えたり。

二 若人よ、望高かれ、心清かれ。かくして汝が前途は洋々たるものならん。

三 のどかな春になつた。そゞろあるきもさを樂しからう。(口)

第四章 音 便

つきたち — ついたち。(月立朔)

さきはひ — さいはひ。(幸)

やうやく — やうやう。(漸)

つかへまつる — つかうまつる。(仕)

若人の便利と或は音他の音とをさす。

音便

右の例のやうに、或音が發音の便宜によつて他の音に轉じるために、それをあらはす假名も變ることを音便といふ。

音便にはイ音便・ウ音便・撥音便・促音便の四種がある。動詞にはこの四種の音便があり、形容詞にはイ音便・ウ音便の二種がある。

イ音便

●イ音便

きぎがい場合に起るに變るもの。動詞連用形が「い」に助詞を接續する

聞きて ———— 一を聞いて十を知る。

仰ぎて ———— 天を仰いで歎ず。

善き ———— 善いかな、言や。

悲しき ———— あゝ、悲しいかな。

動詞

形容詞

○右の外、口語で、「ござります」「下さりませ」「ございます」「下さいます」といふやうな例もある。

ウ音便

●ウ音便

ひくがうヒウに變るもの。

○イ音便の「い」を「聞ひて」「仰る」などと書き誤つてはならぬ。

蹴とひて ———— 筏いかだを蹴うて筑水を下る。

争ひて ———— 先を争うて走る。

短く ———— 髪を短う刈る。

空しく ———— 志を空しうするなかれ。

動詞

形容詞

○形容詞の連用形がサ行變格活用の動詞すに結びついた「全くす」「正しくす」「使命を全うす」「己を正しうして人を正す」といふやうにウ音便となる。

○ウ音便の「う」を「蹴ふて」「争ふて」などと書き誤つてはならぬ。

○副詞の「かく斯」もウ音便に變つて「かういふ事があつた」などといふ。これを「かういふ事」か「いふ事」などと書き誤つてはならぬ。

撥音便

●撥音便

みびにはが撥ねる音のんに變るもの。

踏みて ———— 夕に月を踏んで歸る。

促音便

飛びて——飛んで火に入る夏の蟲。
死にて——死んで護國の鬼となる。

○撥音便のんを踏むで「飛むで」「死むで」などと書き誤つてはならぬ。

四 促音便 ちりひが促る音のつに變るもの。

勝ちて——勝つて兜の緒を締めよ。

有りて——命有つての物種。

誓ひて——誓つて君恩に報い奉らん。

練習

(一) 次の文に誤があれば、その理由を述べて訂正しなさい。

〔例〕水を飲むで源を思ふは人情なり。

- 一 一刻も早く平原を見ようとあせりながら、辛ふじて山を越へた。(口)
- 二 松葉が一面に浮むで水を蔽ふてゐるので、一寸池がある様に見へ

ない。(口)

三 先輩を問ふて教を乞う。(口)

四 養うた上に敬うことが大事だ。(口)

五 仰るで天にはぢづ俯して人にはじす。

六 悲しむだり喜むだり泣ひたり笑ふたりするのは、浮世の常である。
う。(口)

七 淵に臨むで魚を羨むは、退ひて網を結ぶに如かず。

八 弓を射らむとせば、先づ姿勢を正しふすべし。

九 よく人を教えしかば、就ひて學ぶもの常に絶へざりき。

二 口語で、本をかつて来たといふ時のかつては地方によつてその意味がちがふやうです。それを文法上から説明しなさい。

第五章 助動詞

一 文語助動詞の種類と活用

受身の助動詞

● 受身の助動詞

猫、犬に追はる。

鼠、猫に捕へらる。

右の例のる・らるのやうに、他から或動作を仕向けられる意をあらはすものを受身の助動詞といふ。その活用は次のやうである。

る	れ	る	れ	る	れ	る	れ
らる	られ	らる	られ	らる	られ	らる	られ
語	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	

るは四段・ラ變・ナ變の未然形につき、らるはその他の動詞の未然形につづく。(附表参照、以下同じ)

○らるがサ行變格の動詞、例へば罪すに結びついて罪せらるといふべき場合に、現代文では罪さるとすることもある。

○口語の受身の助動詞は、れる・られるの二語で、その活用は次のやうである。

れる	れ	れる	れ	れる	れ	れる	れよ
られる	られ	られる	られ	られる	られ	られる	られよ
語	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形	

動詞につづく方法は文語に準じて類推することが出来る。以下同じ。

可能の助動詞

● 可能の助動詞

十里の道を一日にて歩まる。
我にもこれ位の數はかぞへらる。

右の例のる・らるのやうに、そのものゝ力で或動作をすることの出来る意をあらはすものを可能の助動詞といふ。その活用は受身のる・らると同じく、動詞につゞく方法も同様であるが、たゞ命令形がない。

○口語の可能の助動詞もれる・られるの二語である。

○可能の助動詞は、

子の行末思はる。

故郷の事のみ思ひ出でらる。

のやうに、動作が自然に起つて止められぬ意をあらはすことがある。

使役の助動詞

騎兵、馬を走らす。

主人、下男に木を植ゑさす。

使役の助動詞

人をして低回去る能はざらしむ。

右の例のす・さす・しむのやうに、或動作を他のものにさせる意をあらはすものを使役の助動詞といふ。その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
す	せ	せ	す	する	すれ	せよ
さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ

すは四段・ナ變・ラ變の未然形に、さすはその他の動詞の未然形に、しむはすべての動詞の未然形につゞく。

○さすがサ行變格の動詞、例へば賣買すに結びついて賣買させさすといふべき場合に、現代文では賣買さすとすることもある。

○しむが下二段の動詞得に結びついて得しむといふべき場合に、現代

文では得せしむとすることもある。
○口語の使役の助動詞はせるとさせるの二語で、その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ
させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させよ

尊敬の助動詞

四 尊敬の助動詞

父は讀書を好まる。
先生は本日缺席せらる。
殿下は和歌を好ませらる。
皇后陛下には葉山に行啓せさせ給ふ。
主上ひそかに笠置山に行幸せしめ給ふ。

右のる・らる・せ（すの未然形）させ（さすの連用形）しめ（しむの連用形）のやうに他の動作を敬ふ意をあらはすものを尊敬の助動詞といふ。
る・らるの活用は受身の助動詞のる・らるの活用と同じく、す・さす・しむの活用は使役の助動詞のす・さす・しむの活用と同じであり、動詞からつゞく方法も同様である。

- せ・させ・しめは、通常らる・給ふと結びつけて用ひられる。
- 口語ではれる・られるを用ひるが、これには命令形はない。
- 以上述べた文語のる・らる・せ・させ・しめ、口語のれる・られるの外に、
陛下、大阪へ行幸し給ふ。
朝早くお起きなさる。
夜おそくおやすみあそばす。

右の例の給ふやなさる・あそばすなどは、もと尊敬の意をあらはす動詞であるが、轉じて尊敬の助動詞として用ひられる。
謹みて新年を賀し奉る。

明日午前中に参上いたします。
内々でお話しようすことがある。

右の例の奉るやいたすまうすなどは、もと自分の動作を謙遜していふ動詞であるが、轉じて尊敬の助動詞として用ひる。

われもまたかく思ひ侍り。

本日出發仕り候。

あなたもお読みになりますか。

右の例の侍り候は、もと高貴の人に對し、自分の動作を卑下して鄭重にいふ動詞であるが、轉じて尊敬の助動詞として用ひられる。この場合に口語ではますを用ひる。ますの活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
ます	ませ	まし	ます	ます	ますれ	ませ

練習

(一) 次の文から受身・可能・使役・尊敬の助動詞を選び出し、その種類と活用形とを述べなさい。

〔例〕 歩かうと思へば歩かれない可能、未然こともなかつたが、つれの者に勧められて、とう受身、連用く自動車で來た。(口)

- 一 五十人の兵は行くく百姓をつのり、かゞり火をたかせ、糧食の用意をなさしむ。
- 二 明けの年の秋、また國に往きたまひしあとにて課を立てられて、日のうちには行草の字三千、夜に入りて一千字をかぎりて書き出すべしと命ぜられたり。
- 三 徳川殿、さらば醫師召させよ、とて、これを召させらる。
- 四 御手紙拜見致候。二人ともよく勉強し居らるゝ由、安心致候。

時の助動詞

(イ)完了の助動詞

- 五 月見れば末の代までもしのばれて、見ぬ古のいとゆかしき。
- 六 今にきつと立派な方におなりなさるでございませう。(口)
- (二) 助動詞るるの示すすべての意義を例を擧げて説明しなさい。

⑤ 時の助動詞

(イ)完了の助動詞

櫻かざして今日もくらしつ。
 塵づかに朝顔咲きぬ暮の秋。
 船は沖に向ひて港を出でたり。
 人々皆歸り去れり。

右の例のつぬたりりのやうに、或動作が完全に成立した意をあらはすものを完了の助動詞といふ。その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
つ	(て)	て	つ	つる	つれ	(てよ)
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	○
り	(ら)	(り)	り	る	(れ)	○

括弧を施したものは現代文では殆ど用ひない。以下同じ。

つぬたりはすべての動詞の連用形に、りは四段の已然形とサ變の未然形とにつづく。但し、ぬはナ變にはつゞかない。

○口語の完了の助動詞はたで、その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
た	たら	たり	た	た	たら	

○たりりは次のやうに動作の繼續進行又は状態をあらはすことがある。

春の水淺葱あさぎに流れたり。

我が宿に大雪降り。

霜一面に置けり。

○現在の時は、別に助動詞を用ひないで動詞そのまゝであらはす。

(ロ)過去の助動詞

(ロ)過去の助動詞

昔一人の翁ありき。

野山にまじりて竹をとりつゝ、よろづの事に使ひけり。

右の例のきけりのやうに、或動作が今よりも前に起つた意をあらはすものを過去の助動詞といふ。その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
き	(せ)	○	き	し	しか	○
けり	(けら)	○	けり	ける	けれ	○

○右の表に示したやうに、きは特種の活用をする助動詞で、

公は少しも動する色なく、自若としてその座を守り給ひきとぞ、内の人の物語りし。

はかなく露と消えしかど、其の名はくちせず、諸葛孔明。

といふやうに用ひられる。

○終止形きを用ひる場合に、現代文では、

火災は二時間の長きに亘りて鎮火せざりし。

のやうにしを用ひることもある。

きけりはすべての動詞の連用形につゞく。但し、きは力變とサ變

にうづく場合に限つて、次の表のやうな例外がある。

活用	未然形	連用形
カ 變	來 ^こ し しか	來 ^き し しか
サ 變	爲 ^せ し しか	爲 ^し き

來^きし 來^こし
 方行く末を思ふ。急ぎ
 來^きし 來^こし
 ど及ばざりき。

天神山に遠足をせし事あり。

昨日訪はんとせしかど差支ありて果さざりき。

拂曉を期して敵を襲撃せんとしき。

○サ行四段活用の動詞をししかにつゞけて、暮^しし時「盡^ししかば」な
 どいふべき場合を「暮^せし時「盡^せしかば」などいふこともある。

○口語の過去の助動詞は、口語の完了の助動詞と同じである。

(ハ) 未來の助動詞

むはんと書き、んと發音する。

(ハ) 未來の助動詞

山雨まさに到らむとして風樓に滿つ。

右の例のむのやうに、或動作が今よりも後に起る意をあらはすものを未來の助動詞といふ。その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
む	○	○	む	む	め	○

むはすべての動詞の未然形につゞく。

○口語の未來の助動詞は「うよう」で、四段活用の動詞には「うがつき、その

他の動詞には「ようがつく。

明日は雨が降らう。

やがて日も暮れよう。

「うよう」は活用しない。

過去完了

○ ようをやうと混同してはならぬ。

かういふ事は覚えておくやうに注意しよう。

やうは様[・]の字音で、ようは未來の助動詞である。

○ 完了の助動詞つぬたりりに過去の助動詞きけりを重ねて、動作が過去に完了したことをあらはす。

(一) 花散り
てき。
てけり。

(二) 花散り
にき。
にけり。

(三) 花散り
たりき。
たりけり。

(四) 花散れ
りき。
りけり。

右のうち(三)の外は現代文ではあまり用ひられない。

未來完了

○ 又つぬたりりに未來の助動詞むを重ねて動作が未來に完了することをあらはす。

(一) 花散り
てむ。

(二) 花散り
なむ。

(三) 花散り
たらむ。

(四) 花散れ
らむ。

右のうち(三)が過去の推量として用ひられる外は現代文ではあまり用ひられない。

○ つぬにべしがつづいて「つべし」「ぬべし」となった場合は、つぬは完了の意が全く失はれて單に意味を強めていふだけである。

練習

(一) 次の文から時の助動詞を選び出し、その種類と活用形とを述べなさい。

〔例〕 松山の浪に流れて來し船の、^{過去、連體}やがてむなしくなり^{過去完了、連體}けるかな。

- 一 静かに思へば、よろづに過ぎにし方の戀しさのみぞせむ方なき。
 - 二 先に晝がきたる檜（連体）何となく物足らぬ所ありて氣にかゝりしが、東國へ下る路すがら、箱根山中にてよき枝ぶりの檜を見て、其の意を得たれば、かき添へんために歸りしなり。（連体）
 - 三 故郷にたま〜來つる我を見て、こぼれかゝれる庭の白露。
 - 四 花にあかぬ歎はいつもせしかども、今日のこよひに似る時はなし。
 - 五 君のため世のため何か惜しからむ、すてゝかひある命なりせば。（連体）
- (二) 次の文に誤があれば、その理由を述べて訂正しなさい。

【例】 仰の趣申せしに、それにてよしと仰せられし。（過去）

- 一 市街の中央に大砲を据へて打出せしかば、諸軍勢に乗じて進みし。
- 二 余は久しく病床に呻吟せしが、母の心を盡せし甲斐ありて、さしも重かりき病氣もやう〜癒へて歩行に堪ゆるに至れり。
- 三 こんな静かな部屋に居り、これほど本を持つてゐながら、積むでいただくだけで、讀むのみやうといふ氣はないようです。（口）

- (三) 學ぶの六つの時（現在完了）過去過去完了（過去完了）未來未來完了（未來完了）を示しなさい。
- (四) 次に掲げたもののうち、誤があれば訂正しなさい。

【例】 受けり。（た）

迎へり。這へり。勉めり。讀めり。集めり。射れり。命ぜり。

六 推量の助動詞

推量の助動詞

さる事もあらむ。

しづ心なく花の散るらむ。

何時の頃にかありけむ。

程なく花も咲くべし。

思ふ事なくてぞ見まし。

み山には霞ふるらし。

紅葉亂れて流るめり。

右の例の、むらむけむべしましらしめりのやうに物事を推し量つ

ていふ意をあらはすものを推量の助動詞といふ。その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
む	○	○	む	む	め	○
らむ	○	○	らむ	らむ	らめ	○
けむ	○	○	けむ	けむ	けめ	○
べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	○
まし	(ませ)	○	まし	まし	ましか	○
らし	○	○	らし	(らし)	(らし)	○
めり	○	(めり)	めり	める	めれ	○

む・ましはすべての動詞の未然形に、けむは連用形に、らむ・べし・らし・めりは終止形につづく。但し、らむ・べし・らし・めりはラ變からは連體形につづく。

○べしは推量の外に、可能當然決意命令などの意をあらはすこともある。

- (一) 風起らば雨やむべし。(やむだらう) 推量
- (二) 三尺の秋水鐵をも斷つべし。(斷つことが出来る) 可能
- (三) 油盡くれば火は消ゆべし。(消えねばならぬ) 當然
- (四) 必ず參上仕るべし。(參上仕らう) 決意
- (五) 講堂に參集すべし。(參集しなさい) 命令

○べしは、又ラ變のありと結びついて、べからべかりとして用ひられる。危険なる場所に近づくべからず。

もし援兵の來ることなくば全滅すべかりしなり。

○口語の推量の助動詞にはうようらしいなどがある。

打消の助動詞

㊦ 打消の助動詞

歲月は人を待たず。
 かゝる事ありとも知らざりき。
 必ず人手にはかゝり申すまじ。
 君はまだ遠くは行かじ。
 右の例のずざりまじじのやうに、或動作を打消す意をあらはすものを打消の助動詞といふ。その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	○
ざり	ざら	ざり	(ざり)	ざる	ざれ	ざれ
まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	○
じ	○	○	じ	(じ)	(じ)	○

ずざりじはすべての動詞の未然形につゞき、まじは終止形につゞく。但し、まじはラ變からは連體形につゞく。

○口語の打消の助動詞にはぬないまいなどがある。

練習

(一) 次の文から推量の助動詞と打消の助動詞とを選び出し、その活用形を述べなさい。

〔例〕 急がずばぬれざらましを旅人の後よりはるゝ野路のむらさめ。

- 一 夢さめぬ、真柴やからん、山の井の曉ふかき水やくままし。
- 二 春來ぬと人はいへども、鶯の鳴かぬかぎりはあらじと思ふ。
- 三 春立つと聞きつるからに春日山消えあへぬ雪の花と見ゆめり。
- 四 雉子も鳴かずば打たれまい。(口)

指定の助動詞

(二) 次の動詞に文語ではまじ、口語ではまいをつけなさい。
 (文語) 降る 見る 蹴る 來く 爲す
 (口語) 降る 見る 蹴る 來く 爲す

(三) 次の四つの文の中でどれが正しいかを説明しなさい。
 イ 品物に手を觸れべからず。
 ロ 品物に手を觸るるべからず。
 ハ 品物に手を觸れるべからず。
 ニ 品物に手を觸るべからず。

Ⓐ 指定の助動詞
 中庸は徳の至れるものなり。
 かの紅きは紅葉の流るゝなり。
 孔子は聖人たり。

右の例のなりたりのやうに、物事を指し定める意をあらはすものを指定の助動詞といふ。その活用は次のやうである。

詠歎の助動詞

語	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

なりたりは體言につづく。但し、なりは用言の連體形にもつづく。
 ○指定の助動詞のなりたりは體言についたものは、形容動詞の「静かなり」「燦然たり」とまぎれ易く、又指定の助動詞のたりと完了の助動詞のたりとは形は同じであるが、意味は全くちがふ。
 ○口語の指定の助動詞にはだてすであるがある。

詠歎の助動詞

摘みのこす桑の林に風立ちて夕立すなり、富岡のさと。
 心なき身にもあはれは知られけり、鳴たつ澤の秋の夕暮。
 右の例のなりけりのやうに詠歎の意をあらはすものを詠歎の助

動詞といふ。その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
なり	○	○	なり	なる	なれ	○
けり	○	○	けり	ける	けれ	○

詠歎のなりは用言の終止形につゞくが、指定のなりは用言の連體形または體言につゞく。

詠歎のけりと過去のけりとは、ともに用言の連用形につづいて用法に區別がないから、専ら文全體の意味から考へて區別しなければならぬ。

希望の助動詞

希望の助動詞

外つ國のこと見たし聞きたし。

花の春もみぢの秋のさかづきも、ほど／＼にこそくままほ

しけれ。

右の例のたしまほしけれのやうに、或動作を希望する意をあらはすものを希望の助動詞といふ。その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
たし	たく	たく	たし	たき	たけれ	○
まほし	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ	○

たしはすべての動詞の連用形に、まほしは未然形につゞく。

○口語の希望の助動詞にはたいがある。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
たい	○	たく	たい	たい	たけれ	○

比較の助動詞

比較の助動詞

落花は雪の降るごとし。

光陰矢の如く、月日は流るゝが如し。

右の例の如しのやうに、物事を比較する意をあらはすものを比較の助動詞といふ。その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ごとし	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	〇	〇

ごとしはすべての動詞の連體形につゞく。また、その連體形との間に助詞がをはさむことが多い。體言につゞく時は助詞のをはさむ。

○口語の比較の助動詞にはやうだやうですがある。

但し、やうだやうですは

誰か來るやうだ。誰か來るやうです。

のやうに推量の意に用ひられることもある。

練習

(一) 次の文から助動詞を選び出し、その種類と活用形とを述べなさい。

(例) 男も爲すなる日記といふものを、女もして試みむとて爲する

指定、終止
なり。

- 一 國を思ひ寝られぬ夜の霜の色ともしび寄せて見る劍かな。
- 二 若水をくむ車井のおとすなり今こそ春もめぐりきぬらし。
- 三 貌を正すは心を正すことなり。氣高く美しき姿をとれる時は、心自ら氣高く美しくなるべし。貌を亂し姿を崩す時は、心も自ら亂れ來る。古人が禮を重んじたるは、この理を知り居たればなりき。
- 四 かねても屢々申しし如く、お家の大仇は彼等にあらす、鼠輩の爲に命を落すは、大忠臣の所爲にはあらじ。
- 五 いやいや、おかへし申したら、舞はずに空へお上りになりませう。(口)

(二) 次の文に中古文の法則に合はぬところや誤があれば、その理由を述べて訂正しなさい。

〔例〕 或法律家のしるせしに、罪人の譴責さるること人を(シク活、終止)に

見せしむるは悪ししと覺ゆなりとありし。(具上、連用) (ゆる(下二、連體)) (き(過去、終止))

一 人の好意を無にするべからず。人の親切を忘るべからず。

二 若しすこしにても心をゆるめなば、忽ち他にまどはせられて、多年

の苦心は水の泡と消え失せぬ。

三 かふゆり過を犯さうとは思はなかつた。これから再びくり返さないように氣をつけやう。(口)

四 明朝早くきられるならおいでなさい。いつしよにあの山を越へましやう。(口)

二 助動詞の用法

助動詞が動詞につづくに一定の法則のあることは既に述べた通

りであるが、形容詞または形容動詞が助動詞につづくのにも、助動詞が助動詞につづくのにも、その法則は變らない。

走るは行くの早きなり。(ク活、連體) (指定、終止)

夜はいと静かなりき。(形動、連用) (過去、終止)

此の兒文才あり、いかにも師を擇びて學ばしめらる。(ハ四、未然) (使役、未然) (尊敬、終止)

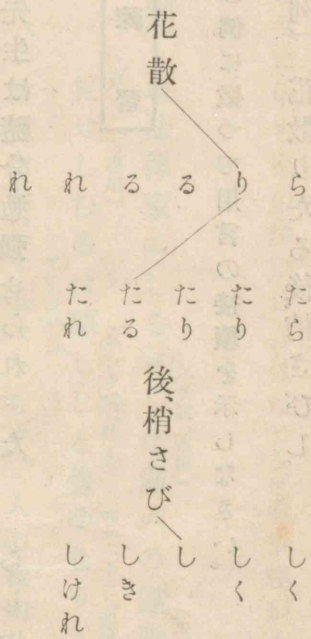
べし。(命令、終止)

先生は随分勉強せられたらしい。(サ變、未然) (尊敬、連用) (完了、終止) (推量、終止) (口)

練習

(一) 次の例に倣って用言の接續を示しなさい。

〔例〕 花散りたる後、梢さびし。



〔注意〕 排列の順序は未然連用終止連體已然命令とする。

- 一 偉人は人を心服せしむべき魔力を有せり。
- 二 君の見らるゝ如き結果を生じたる所以は簡単に述べ難し。
- 三 夜の美感をたゞふるにふさはしき言葉はこの世に幾何もあらざらむ。
- 四 荒れにけりあはれいく世の宿なれや住みけむ人のおとづれもせぬ。

(二) 次の文から動詞・形容詞・形容動詞・助動詞を選び出し、その種類と活用形

とを述べなさい。

〔例〕 おぼしき事シク活、連體いはぬハ四、未然は腹打消、連體ふくるラ下二、連體ゝわざなり指定、終止

- 一 過ぎ來し方を顧みれば、たゞ一夜の夢の心地せらるれど、またつくづくと思ひ續ければ、いと遙けくぞ覺ゆる。
- 二 秋來ぬと目にはさやかに見えぬども、風の音にぞおどろかれぬる。
- 三 一木一草に至るまで歴史あらぬはなく、人をして低回去るを得ざらしむ。
- 四 昨夜はおそく寝ねたれど、今朝は早くも起き出でつ。
- 五 道路は足底の廣さだにあらば歩むべしといふは理のみなり。いかで歩むべからむ。梁の上を歩まば落ちぬべし。
- 六 やあ尼前あまのまへ、秀秋が身に國奪はれむ罪覺えず。命あらむ限は、たゞもとのまゝにてこそあるべけれ。一速に首を刎ねらるべう候」と申せ、尼前。
- 七 高慢な兎は、のろい龜がどうして吾輩に追ひつかれようかと高を

くくつて、途中でちよつと晝寢をしました。(口)

第六章 副詞

一 人はいよゝゝ勇み馬はますゝゝはやる。

二 巖島は古より日本三景の一に數へられて殊に名高く、屋島壇浦は源平の昔話に人の感興を動かすこと甚だ切なり。

右の例で、副詞いよゝゝ・ますゝゝは動詞勇み・はやるの意味を限定し、殊には形容詞名高きの意味を限定し、甚だは形容動詞切なりの意味を限してゐる。

三 いと遙かに見ゆ。

四 もつと靜かに歩め。(口)

右の例で、いと・もつとは副詞遙かに・靜かにの意味を限定してゐる。

○副詞を重ねた場合には、この例のやうに上のが下の意味を限定することが多いが、又

彼は着實に熱心に研究す。

まだなかく寒い。(口)

のやうに、二つの副詞が共に下の意味を限定することもある。

五 わづかに一點の差で敵に勝をゆづつた。(口)

六 風景さながら繪の如し。

七 この成功は、要するに君の努力の結果である。(口)

右の例の(五)のわづかには體言の意味を限定し、(六)のさながらは語句の意味を限定し、(七)の要するには文の意味を限定してゐる。このやうに副詞はおもに動詞・形容詞・形容動詞の意味を限定し、時

としては他の副詞・體言・語句・文の意味を限定するものである。

○副詞は意味を限定することばのすぐ上に來るのが普通であるが、時として、

辯士は悠然と演壇に上りて、徐に口を開きたり。

彼は遂に成功の域に達した。(口)

の悠然と徐に遂にのやうに、他の語句を隔てて限定することもある。

練習

(一) 次の文から副詞を選び出し、どの語の意味を限定してゐるかを述べなさい。

〔例〕あまり景色がよいので、漁夫はぼんやりと海を眺めておりました。(口)

一 我は宋の臣なり。いづくんぞ二朝に仕へんや。願はくは我に死

をたまへ。

二 道端の切株に腰かけて、ひたいの汗をふいてゐると、そよ／＼と吹く風につれて、若葉のほひがひし／＼と身にせまつて來る。(口)

三 潮がすん／＼さがるので、舟はすすと進んで、たちまち海へ出た。ばつと明るくなつた。(口)

四 恐らくこのたそがれ時は、暮れさうで暮れない町の空氣の紫色と共に、もつと／＼長くつゞくやうになるでせう。そして極短かつた冬の日とちやうど反對に一晝夜の大部を晝のやうに明るくしてしまふでせう。(口)

(二) 副詞の定義を述べ、かつ簡単な例を示しなさい。

第七章 接續詞

一 松島・巖島及び天の橋立を日本三景といふ。

二 文を學び且武を習ふ。
右の例の及び且などは並列又は累加の意をあらはす接續詞である。

三 霞か雲かはた雪か。

四 君は參加しますか。それともやめますか。(口)

右の例のはたそれともなどは選擇の意をあらはす接續詞である。

五 諸車の通行を禁ず。但し郵便車はこの限にあらす。

六 日すでに暮れぬ。されど宿るべき所もなし。

右の例の但しされどなどは制限又は反戻の意をあらはす接續詞である。

七 われらが住む世界は、其の形まるくして球の如し。故に之を地球といふ。

八 求めよ、然らば與へられん。

右の例の故に然らばなどは、原因又は理由の意をあらはす接續詞である。

○書簡文に用ひられる間處段條なども接續詞に屬する。

○接續詞と副詞とは語の形が同じで紛れ易いものがある。

山また山を分けて行く。

接續詞

彼はまた失敗した。(口)

副詞

練習

次の文の傍線を施した語の品詞は何ですか。

イ 後便に又いろく申しあげませう。(口)

ロ 家を思ひ且國を憂ふ。

ハ 君の行ふところ或は君をあやまらん。

ニ 天然の美は更に人工の美よりもすぐれたり。

第八章 文語助詞の用法

文語助詞はその数が多く、用法もまた複雑である。今その中で特に注意すべきものゝ用法を述べよう。

一 ば

明日雨降らば遠足を中止せん。……………(イ)

今日雨降れば遠足を中止せり。……………(ロ)

水清くば泳がん。……………(イ)

水清ければ魚棲まず。……………(ロ)

風静かならば花散らざらん。……………(イ)

風静かなれば花散らず。……………(ロ)

知らずば言つて聞かせん。……………(イ)

知らねばこそ教を乞ひたるなれ。……………(ロ)

ば

ともども

一 ともども

ばは、右の例の(イ)のやうに用言の未然形に結びついて**假定**の条件をあらはし、(ロ)のやうに已然形に結びついて**確定**の条件をあらはす。

○口語では用言の假定形に**ば**が結びついて假定の条件をあらはし、終止形に**ので**または**から**が結びついて確定の条件をあらはす。

明日雨が降れば遠足を中止しよう。

今日は雨が降る**ので**遠足を中止した。
から

繪に書くとも筆も及ばじ。

浪荒くとも出帆せん。

出でて往なば主なき宿となりぬとも、軒端の梅よわれを忘るな。

右の例のやうにともは動詞の終止形または形容詞の未然形に結びついて假定の條件をあらはす。(助動詞との結びつき方は動詞形容詞に準じて知ることが出来る)

繪に書け

ど ども

筆も及ばず。

浪荒けれ

ど ども

出帆せり。

天氣清朗なれ

ど ども

波高し。

そ 終形
ど ども

右の例のやうに、どもは用言の已然形に結びついて確定の條件をあらはす。

○ともは口語ではてもとなつて用言の連用形に結びついて假定の條件をあらはす。

浪が荒くても出帆しよう。

○どもは口語ではけれどけれどもとなつて用言の終止形に結びついて確定の條件をあらはす。

浪が荒い

けれど
けれども

出帆した。

○ともを動詞及び動詞のやうに活用する助動詞の連體形に結びつけて。

數百年を経るとも變らじ。

如何に批評せらるるとも意に介せじ。

強ひて之を遵奉せしむるともその效あるまじ。

○ともの代りとして現代文ではもを用ひることがある。

何等の理由あるも(ありとも)議場に入ること許さず。

期限は今日に迫りたるも(たれども)準備は未だ成らず。

たゞし、誤解を生ずる恐ある場合、例へば

請願書は會議に付するも(すとも)之を朗讀せず。

給料は低きも(くとも)應募者は多かるべし。

のやうなのは之を用ひない。

練習

(一) 次の文に誤があれば、その理由を述べて訂正しなさい。

〔例〕 霽るれば出でむと待つ雨の夕(なれども)になる(確定にする、故に已然からどもにつける)とも止みもせず。

一 志を立て、郷貫を出でたるわれ、學もし成らずむば死せどもかへ(くらじ)

二 家亡べども恨みんともせず、國衰へども悲しむことを知らず。歎(ふとも)すべきかな。

三 たとひ一度失敗したれども、決して初志を棄てることなかれ。

四 かれ老ひたりとも、戰場にのぞめば必ず壯者を凌がむ。

五 もし御意見も候へば、ゆめ／＼御遠慮下されまじく候。

(二) 例を擧げて次の句の意義を文法上から説明しなさい。

イ 無くば、

ロ 無ければ、

ハ 無かりせば、

㊦ なな……そ

御油斷あるな。

近く寄つて過すな。

人に疎んぜらるな。

なは右のやうにラ行變格の動詞には連體形に、その他の動詞には終止形に結びついて禁止の意をあらはす。

な・な……そ

な
為^せ來^こ
そ。

な行き給ひそ。

右の例のやうに、な……その形で禁止の意をあらはすこともある。この場合にはその中間にある動詞は、カ行・サ行兩變格の動詞は未然形、その他の動詞は連用形である。

○口語の場合もなを用ひるが、文語のラ行變格の動詞は口語では四段に活用するから、口語の禁止のなはすべての動詞の終止形に結びつく。

や・か

④ や・か

有りや無しや。

有りきや無かりきや。

有るか無きか。

有りしか無かりしか。

右の例のやうに、やは用言の終止形に、かはその連體形に結びついて疑問の意をあらはす。

○現代文では、やを連體形に結びつけて、

こゝに有るや。

面白きや。

父に似たるや母に似たるや。

のやうに用ひることもある。

○口語では、

來るか來ないか。

あの話を聞いたか。

のやうに、かだけが疑問の意をあらはす。

何を書くか。

答、幾、何なるか。

春と秋といづれがよきか。

右の例のやうに、何、幾、何、いづれなどの疑問の語が上にある場合には、**はか**を用ひて文を結ぶ。

○現代文では、

幾、何なりや。

如何にすべきや。

のやうに、上に疑問の語のある場合でも、**や**を用ひることがある。

人、や、ある。

春、や、疾、き、花、や、遅、き。

花、や、咲、きた、る、鶯、や、鳴、き、つ、る。

誰、か、あ、る。

昨、と、今、と、い、づ、れ、か、樂、し、き。

い、か、で、か、知、ら、む。

右の例のやうに、**や**、**か**は用言の前に置いて疑問の意をあらはすこともある。この場合には下は連體形で結ぶ。

浪にたゞよふ氷山も、來らば來れ恐れむや。

精神一到何事か成らざらむ。

右の例のやうに、**や**、**か**は疑問の意から轉じて反語となる。

○口語では、

誰がそんな事をするものか。

のやうに**か**だけが反語の意をあらはす。

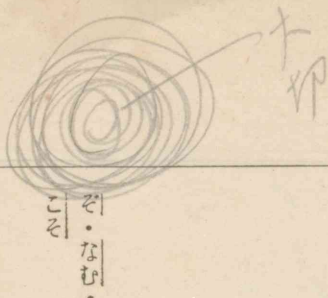
○**や**、**か**に詠歎の意をあらはす助詞は、**を**を加へた**やはか**はもまた反語の助詞で、**や**、**か**よりは一層意味が強い。

いかで人に劣らむやは。

かほどの道理誰かは思ひよらざらむ。

五 **ぞ**、**なむ**、**こそ**

たびねする草の枕に霜さえて、有明の月の影ぞまたるる。



ぞ・なむ・こそ

これなむ都鳥とは呼ぶなる。
右の例のぞなむは強く指し示す意をあらはす助詞で、下は連體形
で結ぶ。

八重葎しげれるやどのさびしさに、人こそ見えね、秋は來に
けり。

人は愛敬ありて言葉多からぬこそよけれ。

右の例のこそはぞなむよりも一層強く指し示す意をあらはす助
詞で、下は已然形で結ぶ。

上にぞなむ又はやかのある場合に下を連體形で結び、上にこそ
ある場合に下を已然形で結ぶことを係結といひ、上のぞなむやか
及びこそを係といひ、下の特別の活用形を取つた語を結といふ。

○もし結となる語を直に次の語につゞける場合には、次の例のやうに
その結はあらはれないで自然に隠れてしまふ。

係結

人々なむ別れがたく思ひて、頻りにとかくののしる中に夜ふけ
ぬ。

古は、車もたげよとこそいひしを、今様の人は、もてあげよといふ。

○口語ではぞこそなどが用ひられても、文の結びには何等の關係も及
ぼさない。

誰ぞ手傳に來てくれませんか。
ようこそいらつしやいました。

練習

次の文に誤があれば、その理由を述べて訂正しなさい。

〔例〕 田舎に生れたるこそ幸なりと思ひ なれ(こそ)の結、故に已然) たり(終止にする) たれ。

一 弓を射んとするものは、姿勢を正しふし、一本の矢をもあだにな
せじと思ひて心をゆるむべからず。

二 とやせんかくやすべしと案じわづらう。

- 三 住居を定むるに、都會と田舎とはいづれがよしと君は信じらるるや。
- 四 我こそは熊谷二郎直實なれと高らかに名乗りけれ。
- 五 この川に沿ひて行けば寺の前に出づべし。その隣の家ぞ君の訪ぬる家なりと教へたる。
- 六 いつこゝを立去りたりやと何人に問はるるとも、必ずそれに答ふるな。
- 七 庭に植ゆる草木も、伸びたるを抑え、たふれたるを起しなどしてこそ、よき姿にはなるなりとききしか。
- 八 昔受けまじき罪をうけこの地に生を終りし人の裔、今もなほあるやと尋ぬれば、かたへに青ざめる顔して立ちし一青年を指して、彼こそそれと教へけれ。
- 九 開闢より以來かゝることあるべくとも覺へず、神明の程こそ有難しと東天に向ひてしばし祈願をこめられける。

と

六と

月と花とを賞す。

これ偏に徳あると徳なきとによるなり。

世に用ひらるると用ひられざるとは、固より彼が問ふところにあらず。

右の例のやうに、とは事物を並列する場合に用ひられ、語句ごとに幾つでも重ねるのが本則である。

○このとは體言に結びつく語であるが、用言にはその連體形に結びつく。この場合はその連體形の下にあるべきこと、ものなどの省略されたものと見てよい。

○現代文では、

宗教と教育の關係を論ず。

京都と神戸と長崎へ行く。

のやうに、誤解を生じない場合には最後のとを省くことがある。但

し、

吉田君と中島君の弟は同級生なり。

のやうに、

吉田君と中島君との弟は同級生なり。

吉田君と中島君の弟とは同級生なり。

と意味が二種に解せられるものは、これを省いてはならない。

彼は毎朝五時に起くといふ。

ものいへば唇寒しといふ句あり。

孟子は性は善なりといへり。

右の例のとは、上の文を受けてそれを指示する意をあらはす助詞で、通常用言の終止形に結びつく。

○このとは、上の文に係結の助詞がある場合には用言の連體形または已然形と結びつき、上の文が命令の意味をあらはす時は命令形に結びつく。

人やあると問ふ。

何の恥づるところかあるべきといふ。

ものあはれは秋こそまされと人ごとにいふめり。

急がばまはれといふ諺あり。

○現代文では、

月出づると見えて……。

終日業務を取扱はしむるといふ。

のやうに、上の係結の助詞がなくても連體形に結びつくこともある。

練習

(一) 次の文の中にあるとの意味の異同を説明しなさい。

イ 古語にいはく、妖は徳に勝たすと。

ロ 悔ゆとも及ばじ。

ハ 取ると取らざるとは汝にまかす。

に・へ

(二) 次の文の意味の異同を説明しなさい。

- イ 一郎二郎と三郎を訪ふ。
- ロ 一郎と二郎と三郎を訪ふ。
- ハ 一郎二郎と三郎とを訪ふ。

セに・へ

- 東京に着く。
- 門前にたゞずむ。
- 東京へ行く。
- 南へ南へと進む。

右の例のには動作の歸着する點をあらはし、へは動作の進行する方向をあらはす。

○口語では殆どこの區別がない。

東京に
へに
着く。

東京に
へに
行く。

だに・すら・さへ

だにすらさへ

鳥にだに若かず。
禽獸すら恩を知る。
右の例のだにすらは、軽い方を擧げて重い方を類推させる意をあらはす。

○口語では、

鳥にさへ及ばない。

禽獸でも恩を知る。

のやうにさへても用ひる。

雨降るに風さへ加はりぬ。

己が名のみかは、親の名さへ出でぬべし。

右の例のさへは、あるが上になほ物の添ひ加はる意をあらはす。

○口語ではまてを用ひる。

ばや・なむ

九 ばや・なむ

雨が降るのに風まで加はつた。
自分の名だけか、親の名までが出るだらう。

心あらむ人に見せばや津の國の難波あたりの春のけしきを。

高砂のをのへの櫻咲きにけり、外山の霞たたずもあらなむ。
右の例のばや・なむは願望の意をあらはす助詞で、いづれも用言の未然形に結びつく。

十 し

思出の深き船路や、つゝかなく今日しも果てぬ。
時に范蠡なきにしもあらず。

右の例のしは語意を強める場合に用ひられる助詞で、主として體言や助詞に結びつく。

練習

(一) 次の文に誤があれば、その理由を述べて訂正しなさい。

〔例〕 此處へ塵芥を捨てるべからず。
(動作の歸着點) (つゝ、タ下二、終止)

- 一 洋服地と帽子の見本を送れ。
- 二 金澤に行き兼六園へ遊ぶ。
- 三 立錐の餘地さへ無かりきとぞ。
- 四 雨やみて月すら明なるに、いかで此の良夜を空しふすべし。

(二) 次の文の傍線を施した助詞の用法を説明しなさい。

〔例〕 聲たえず鳴けやうぐひす、一年にふたゝびとだに來べき春かは。
詠歌 反語 類推

- 一 住む館より出でて船に乗るべき處へ渡る。
- 二 生きとし生けるもの誰か子を愛せざらん。

- 三 三とせすぎで浦島は故郷に歸りけるとなむ。
- 四 月をだにあかす思ひて寝ぬものを郭公さへ鳴きしきるかな。
- 五 鶯は谷の古巢を出でぬとも、わが行方をば忘れざらなむ。
- 六 朝夕なくてかなはざらむ物こそあらめ、その外は何も持たでぞあらまほしき。

第九章 感動詞

- 一 あら面白の景色やな。
- 二 あはれ、今年の秋も往ぬめり。
- 三 やれ、これで自分の責任も果された。(口)
- 右の例のあらあはれやれ、などは強い感情の刺戟によつて自然に發する語で、いづれも感動詞である。
- 四 やあ、正綱頼將が十四歳に遇ふこと再びやあるべき。
- 五 いか、與一、あの扇の眞中射て敵に見物せさせよかし。

六 さあ、始めよう。(口)

感動詞には右のやあ、いかに、さあなどのやうに、呼びかけたり誘つたりするものもある。

○「悲しいかな」「行けや人々」の「かなや」のやうに、文の中間又は末尾にあるものは、詠歎の意をあらはす助詞である。

練習

次の文から感動詞を選び出しなさい。

- 【例】おや大變だ。まあどうしよう。(口)
- 一 いで、軍艦に乗組みて、我は護らむ、海の國。
- 二 大手搦手の寄手これを見て、すはや、大塔宮の御自害あるは、我先に御首を賜らむとて、四方の圍を解いて一所に集まる。
- 三 あつばれ名馬や、何者の馬ぞ。
- 四 あなあはれ、尊き神の宮居かな。

第十章 紛れ易い文語品詞

品詞の中には語形が同じでもその所屬を異にするものがあつて極めて紛れ易いから次にその主なものを示さう。

一 し

生き残りしもの。
生きとし生けるもの。
(過去の助動詞きの連體形)
(語意を強める助詞)

二 しか

斃るゝまでこそ戦ひしか。
召されしかば参りき。
(過去の助動詞きの已然形)
(過去の助動詞きの已然形)

(同)

三 な

何事もなかりしか。
雨霽れなば行かむ。
軒端の梅よ春を忘るな。
花の色はうつりにけりな。
あそび暮さな。
(禁止の助詞)
(詠歎の助詞)
(願望の助詞)

に ぬ ね ばや

四 に

死にし子顔よかりき。
聲をあげてぞ泣きにける。
春來れるに花咲かず。
(ナ變動詞死ぬの連用形の語尾)
(完了の助動詞ぬの連用形)

五 ぬ

花咲きぬ。
來ぬ人を待つ。
(打消の助動詞すの連體形)

六 ね

人こそ見えね秋は來にけり。
とく去りねなどのたまふ。
(打消の助動詞すの已然形)
(完了の助動詞ぬの命令形)

七 なむ

故郷に歸りなむ。
故郷に歸らなむ。
故郷になむ歸りける。
(願望の助詞)
(係結の助詞)
(願望の助詞)

八 ばや

心あらむ人に見せばや。
心あてに折らばや折らむ。
紅葉すればや照りまさるらむ。
(假定の助詞ばに疑問の助詞やの結びついたもの)
(確定の助詞ばに疑問の助詞やの結びついたもの)

なり

たり

らむ

九なり

燈下親しむべき時となりぬ。
夕立すなり富岡のさと。
彼は余を欺きたるなり。
山は紫に、水は明かなり。

(ラ行四段の動詞)
(詠歎の助動詞)
(指定の助動詞)
(形容動詞の語尾)

十たり

君君たり、臣臣たり。
空うらかに晴れたり。
百花爛漫たり。

(指定の助動詞)
(完了の助動詞)
(形容動詞の語尾)

十一らむ

しづ心なく花のちるらむ。
心知れらむ人に見せばや。

(推量の助動詞)
(完了の助動詞)の未然形に
未来の助動詞むの結びついで

線習

次の文の傍線を施した部分の異同を説明しなさい。

例

(イ) 花は咲けりや。
(ロ) 珍らしやこの花。

疑問の助詞
詠歎の助詞

一

(イ) 奥山に入りにし人は歸り來ぬ。
(ロ) 才なき身にしあれば望も絶えぬ。

二

(イ) 必ずこの日をあやまり給ふな。
(ロ) 「信ある言を告げなば齡も延びなんに。」と伴ひて家に歸る。

三

(イ) 昨日こそ年ははてしか春がすみ春日の山にはやたちけり。
(ロ) うなぎ釣る舟たゞ一つ見えしかどいつしかそれも見えずな

四

(イ) 庭の面はまだ乾かぬに、夕立の空さりげなくすめる月かな。
(ロ) 往にし安元三年四月二十八日かとよ。

五

(イ) 山巔に達せざるに足は蹇へにけり。
(ロ) 花無ければや人の訪ひ來ぬ。
問はばや遠き世々の跡。

六

(イ) (ロ) (ハ) (ニ) (ホ)

ふるさとそぞろにしのばれて、いとも露けき秋にぞありける。用事をはれるものは早く退出して、他人に迷惑をかくな。あすの榮えを願へばこそ、けふのなほざりは許されぬ。掃除坊主は罪もなく蜂にさされて、頼む御堂の蔭もうらめし。師のとぶらはれし情の深さは、たまひし家づとの數々よりも嬉し。

七

(イ) (ロ)

囊中の文書は、皆岩倉公の塾居中に計畫せられて、玉松操といふ人に起草せしめられつる復古經綸の策案なりき。捨てられし兒の心まで思ひやられてあはれなり。

八

(イ) (ロ) (ハ)

再び歸り來べき都ならねばとて、一門の邸宅を悉く一炬の煙となしはてぬ。君國の爲に死ね。疾く往きねかし。

九

(イ) (ロ) (ハ) (ニ) (ホ)

鳴く鶯の聲すなり。かの山は富士山なり。その謀空しくなりにけり。波靜かなり。風となり、雨となりぬ。

〇

(イ) (ロ) (ハ)

この時の彼の態度は實に堂々たるものなりき。主人はいたく寝入りたり。國家の柱石たり。

二

(イ) (ロ)

祝ふ今日こそ樂しけれ。かくこそありけれ。

三

(イ) (ロ)

御配慮まことにかたじけない。(ロ) いかなる時代の伸展にも青年の努力を伴はない場合はない。(ロ)

(イ) このやどのあるじにやあらむ、よなかにおき出でて、さもいみじき雨風かな。かくて明日は必ずはれなむ」とぞいふなる。ふせりて、いかでさもあらなむとねんじをり。折にかなひて面白きこといひあへりとなむ。子を思ふ道をぞ祈る、すべらぎに仕ふるあとをたがへざらなむ。

(ニ) かたちこそみやまがくれの朽木なれ、心は花になさばなりなむ。

(ホ) 柿本人麻呂なむ歌の聖なりける。

(イ) 昔のすみかは跡もとどめず、人訪はぬ野らと荒れ果てたり。都のつはものは擧つて引き返しぬ。正行が軍のあまり強きに。

(ハ) をさなごのまぬとしはなけれども、なほ親に似るものなりけり。

文

第一章 文の成分

主語 述語

一 主語・述語

鳥主語 飛ぶ述語
 風主語 清し述語
 水主語 は 澄んでゐる述語 (口)

右の例のやうに主語は文の主題となり、述語は主題の動作・有様などを述べる語である。文は主語と述語とが結びついて一つのまとまつた思想をいひあらはすもので、正式の文には必ず主語と述語とが備はつてゐる。

○主語は、おもに體言が單獨かまたは助詞と結びついたものから成るが、又

過ぎたるは及ばざるが如し。

辱かたじけなきは親のいつくしみなり。

のやうに、體言に準ずるものも主語となる。

○述語は、おもに用言が單獨かまたは助詞と結びついたものから成るが、又

汝なれは誰ぞ。

風景繪の如し。

あれでも人間だらうか。(口)

のやうに、體言と助詞や助動詞と結びついたものも述語となる。

○一つの文に主語も述語も重なることがある。

梅も桃も櫻も咲いた。(口)

その徳行仰ぐべし貴むべし。

補語

○補語

一郎も二郎も勉強し運動す。

雁補語が空補語を飛ぶ。(口)

湯補語が水補語となる。(口)

信長補語光秀補語に討たる。

病補語は口補語より入る。

右の例のやうに、補語は述語の意味を補うてその文意を完全にす
る語である。

○補語はおもに體言にをとによりなどの助詞の結びついたものであ
るが、又

水は低きに随ふ。

老人が若いのに扶けられる。(口)

のやうに、體言に準ずるものも補語となる。

修飾語

○一つの文に補語が二つ以上あることもある。

教師生徒に文法を授く。

弟は犬に名をジョンとつけた。(口)

◎修飾語

遠き山々霞みわたる。

富士山は皚々たる白雪を戴く。

風烈しく吹く。

右の例のやうに、修飾語は主語・述語・補語を修飾する語である。

修飾語には次の二種がある。

(イ) 形容詞的修飾語

(イ) 形容詞的修飾語

健全なる精神は健全なる身體に宿る。

雄辯な彼は幾多の聴衆に深い感激を與へた。(口)

右の例のやうに、體言を修飾するものを形容詞的修飾語といふ。

(ロ) 副詞的修飾語

(ロ) 副詞的修飾語

○形容詞的修飾語は幾つも重なつて同じ體言を修飾する事がある。

廣い深い湖水が森の中にあります。(口)

飛行機が晴れた靜かな空を飛んでゆく。(口)

大河洋々として流る。

船は飛ぶが如く進みたり。

遙かに富士の山が見える。(口)

右の例のやうに用言を修飾するものを副詞的修飾語といふ。

○副詞的修飾語は幾つも重なつて同じ用言を修飾することもあり、

又他の副詞的修飾語を修飾することもある。

群衆は東からも西からも集つた。(口)

夕日いと美しく輝く。

獨立語

④ 獨立語

日すでに暮れぬ。されど宿るべき所なし。
やあ、いかに、あれなるは佐野源左衛門の尉常世か。
瓢や、瓢や、我汝を愛す。

會長は、會員これを互選す。

右の例の、されど(接續の語)、やあ、いかに(感動の語)、瓢や(呼掛の語)、會長は(提示の語)のやうに、文の主要部から獨立するものを獨立語といふ。

以上述べた主語・述語・補語・修飾語・獨立語のやうに文を構成する要素を文の成分といふ。

文の成分

練習

(一) 次の文を文の成分に分けなさい。

〔例〕 子供は餘念なく、麩を追ふ池の鯉魚を見守る。

- 一 艱難汝を玉にす。
- 二 荒れ果てたる城址は、はやく狐狸の住家となれり。
- 三 爛漫たる櫻花、さながら雲の如く霞の如し。
- 四 余は未だ嶮しく且高き山に登らず。
- 五 帝國議會は毎年之を召集す。
- 六 いかに母御前、父はいづくにましますぞや。
- 七 道ばたの木、權は馬に喰はれけり。
- 八 瓶にさす藤の花房、短ければ疊の上にとゞかざりけり。
- 九 向ふに見えるのが私の學校です。(口)
- 一〇 この會社は品行のよい人ばかり雇ひます。(口)
- 一一 二郎君、君はよくまあ、そんなに早く起きられましたね。(口)
- 一二 「今日」といふ語を修飾語にした文と主語にした文とを一つづつ作りな

正序

一 正序

文の成分は、これを排列するにほゞ一定の順序がある。

(一) 主語は述語の上であり、述語は主語の下にある。

主 述
月出づ。

主 述
空が青い。(口)

(二) 補語は主語と述語との間にある。

主 補 述
仁者は山を樂しむ。

主 補 補 述
弟が植木に水をやつてゐる。(口)

(三) 修飾語は修飾される語の上にある。但し、述語の修飾語は主

さし。

第二章 文の成分の位置及び省略

倒置

一 倒置

文の意味を強め又は言葉の調子を整へるために、わざと成分の位置を顛倒することがある。

(一) 主語・述語の倒置

語のすぐ下にあることが多い。

修 主 修 補 述
我が軍大いに敵兵を撃破せり。

修 主 修 補 述
小さい子供達が面白さうに野球の話をしてゐた。(口)

(四) 獨立語は文の首位にある。但し、接續の語は接續すべき語・句又は文の間にある。

獨 主 述
あ、日が出はじめた。(口)

主 補 述 獨 主 補 述
兄は文を學び、而して弟は武を講ず。

なつかしや、我が故郷。

開け、この花。

(二) 補語の倒置

雲のいづこに月やどるらむ。

君は御承知ですか、この問題の解式を。

(三) 修飾語の倒置

私は忍ばん、堪へ難くとも。

それは大變でしたね、實に。

(四) 獨立語の倒置

あれ見給へ、箱王殿。

もうだめだ、あゝ。

省略

● 省略

文を簡潔にし又は語勢を強めるために、意味の明確を失はない範圍に於て或成分を省略することがある。

(一) 主語の省略

(汝は)前へ進め。

(我々は)公園の樹木を愛しませう。

(二) 述語の省略

千里の道も一步より(始まる)。

皆さんこちらへ(おいで下さい)。

(三) 補語の省略

我は少しも(それを)知らざりき。

妹が(家に)歸つた。

○以上はいづれも文の成分を省略したものであるが、この外、成分の主

要でない部分を省略することもある。

勉強は幸福の母(なり)。

人は人(だ)、我は我(だ)。(口)

練習

(一) 次の文の省略された部分は補ひ、倒置されたものは正しい順序に置き換へなさい。

[例] 元朝の見るものにせん富士の山(を)我は(一)

- 一 正直の頭に神宿る。
- 二 とまれ蝶々、咲く花に。
- 三 苦は樂の種、樂は苦の種。
- 四 土手に登るべからず。
- 五 福は内、鬼は外。
- 六 清水の上から出たり春の月。

- 七 花の陰あかの他人は無かりけり。
 - 八 優勝旗を會長が授與せられた。(口)
 - 九 そんな事を君は誰から聞いたのですか。(口)
- (二) 次の文の主語を示しなさい。(口)
- [例] 君は何時出發するの^主か。(口)
行つてまゐります^主。(私^主は)。(口)
- 一 御主人様にはいかゞ御くらし遊ばされ候や。
 - 二 昨日の雨には閉口した。(口)
 - 三 太郎や、火燧の火は消えたかね。(口)
 - 四 僕もつれて行つて下さい。(口)
 - 五 狐と虎がやつてくる。(口)
 - 六 子供が犬と遊んでゐた。(口)
 - 七 お茶でもあがれ。(口)

第三章 節

花咲く。

香が高い。(口)

右の例は、いづれも主語と述語とを備へた完全な文である。然るに、今これが

花咲く春も近づきぬ。

梅の花は香が高い。(口)

のやうに用ひられる時には、大きな文の一部分となる。かやうに、文が他の文の一部分となつたものを節といふ。

節には主語節・述語節・補語節・修飾節・對立節の五種がある。

一 主語節 主語の用をする節。

花の美しきは櫻なり。

主語節

節

述語節

一 述語節 述語の用をする節。
月日のたつのは早い。(口)

象は體大なり。

牡丹の花は色が美しい。(口)

二 補語節 補語の用をする節。

誰か身體の健康なるを欲せざらん。

観客は花火のあがるのを待つてゐる。(口)

三 修飾節 修飾語の用をする節。

能ある鷹は爪をかくす。

風が吹くので花が散る。(口)

四 對立節 對立的に結びついてゐる節。

夏は暑く、冬は寒し。

垣は崩れ、屋根は漏り、壁は落ち、家は傾いてゐる。(口)

對立節

修飾節

補語節

練習

次の文から節を選び出し、その種類を述べなさい。

〔例〕 君子は人の己を知らざるを憂へず。

補語節
主補述

- 一 春の水山なき國を流れけり。
- 二 雪は鵝毛の飛ぶが如し。
- 三 今年は枝が折れる程實がなりました。(口)
- 四 花の咲いた木の下に人が大勢集つてゐる。(口)
- 五 子供達は飛行機が來たと手をうつて喜んだ。(口)
- 六 伯父は色の白い耳の長い小犬を飼つてゐる。(口)
- 七 私たちはそこで夜が明けるのを待ちました。(口)
- 八 水は方圓の器にしたがひ、人は善惡の友による。

第四章 文の種類

單文

文はその構造の上から、單文・複文・重文の三種に分ける。

● 單文

山高し。

父母の恩は、山よりも高く海よりも深し。

釋迦・孔子・キリスト・ソクラテスは世界の四聖である。(口)

右の例のやうに、主語と述語との文法上の關係がたゞ一回だけ成立する文を單文といふ。

複文

● 複文

花の散るは蝶の舞ふに似たり。

雨の降る日は陰氣だ。(口)

所變れば品變る。

重文

右の例のやうに、對立節以外の節を含む文を複文といふ。

●重文

去る者は追はず、來る者は拒まず。

月明かに、星稀に、烏鵲南に飛ぶ。

右の例のやうに、對立節を含む文を重文といふ。

○文は右の三種であるが、實際はこれらが更に混合して頗る複雑な形を取るが多い。

花笑ひ鳥歌ふ春は人の心ものどかなり。

(これは重文を含む複文である)

春來れば花咲き、秋來れば葉落つ。

(これは複文の對立する重文である)

春は花咲き鳥啼き、秋は紅葉照り蟲すだく。

(これは重文を含む複文の對立する重文である)

練習

次の文の構造について説明しなさい。

〔例〕彼は^主何時もとは^補相手の^修様子が^修違つてゐることに^述氣付

いた。(口) (複文)

- 一 我等は時のうつるを知らざりき。
- 二 折節のうつりかはるこそ物ごとにあはれなれ。
- 三 大廈の將に覆らんとするは、一木のよく支ふる所にあらず。
- 四 規模の雄大にして建築の宏壯なる、實に天下に冠たり。
- 五 私の毎日通る道筋は、電車や自動車が絶間なく往來します。(口)
- 六 勝負がつかないから、兩方が仲直りをしました。(口)

- 七 二月十一日、國民は誰でもこのめでたい日を祝はぬ者は無い。(口)
- 八 友よ、父上は君の卒業する日を指折り數へて待ち居給はん。

代現
中等日本文法 上級用 終

附 錄 (一)

國語變遷の沿革概要

國語の變遷は、これを

- 一 聲音
- 二 文字
- 三 語彙
- 四 文法

の四方面から見なければならぬのであるが、こゝには文法の變遷を主とし、動詞・形容詞・助動詞及び助詞について、その一斑を述べることにする。

一 動 詞

動詞の活用

〔動詞の活用〕

動詞の活用は、平安朝時代には

四段 上二段 下一段 下二段 カ變

サ變 ナ變 ラ變

の九種が具つたが、奈良朝頃には下一段活用はなくて八種であつた。即ち後世下一段活用に屬する蹴るといふ動詞は、奈良朝時代にはくゑくうとワ行下二段に活用してゐたのが、平安朝に入つてこえこゆとヤ行下二段に活用するやうになり、これらがけけると下一段活用としてあらはれたのは平安朝の中頃である。

日本書紀
元正天皇養老四年、舍人親王・太安萬侶等撰。

新撰字鏡
醍醐天皇昌泰年中、僧昌住作。

落窪物語
冷泉天皇の頃の書といふ。

土佐日記
朱雀天皇承平四年、紀貫之作。

源氏物語
一條天皇の頃紫式部作。

枕草紙
一條天皇の頃清少納言作。

更級日記
後冷泉天皇康平年中、菅原孝標女作。

動詞の音便

この蹴るは、現今では更に「蹴らない」「蹴りました」といふやうに、ラ行四段に變る傾向さへある。

〔動詞の音便〕

只今の太政大臣の尻はけるとも、この殿の牛かひに手ふれてむや。

蹴散 此云^ヲ俱^フ穢^ニ簸^ハ邏^カ邏^ス箇^ノ須^ニ。(日本書紀)

躡 萬利古由。(新撰字鏡)

奈良朝時代にはまだ音便といふものは殆ど無かつた。動詞の音便が盛になつたのは平安朝以後のこと、四段活用の連用形が用言又は助詞のてに連るときにあらはれ、殊にイ音便とウ音便とが非常な勢を以て流行して言語の變遷する一大動機となり、言文の二途になる趨勢を示した。

池めい(きて)くぼまり水づける所あり。(土佐日記)

心ぼそしと思ひて泣い(き)たまへば、…(源氏物語)

まい(して)雁などのつらねたるが、…(枕草紙)

冬になりて、ひぐらし雨ふりくらしい(したる)。(更級日記)

右はきしがいに變つた例である。

よき人は物の心を得給ふ方のいとことにもものしたまう(と)ければ…(源氏物語)

例のいづくよりとう(り)でたまふ言の葉にかはあらむ。(源氏物語)

右はひりがうに變つた例で、とうでは、

とりいで(取出で)↓とりで↓とうで

の順に變化したのである。
撥音便は、

手をきるきる摘ん(ミ)だる菜を、(土佐日記)

木の根を掘り食ん(ミ)で、(催馬樂)

大臣此レヲ聞テ驚キ泣キ悲ン(ミ)デ、今ハ世ニ有リトモ何ニカセムト云テ、(今昔物語)

のやうに、平安朝の中頃にも多少見えてゐるが、促音便は平安朝末期になつてやうやくあらはれて來た。

各ノ弓ヲ引テ箭ヲ放ツ(テ)テ馳セ違フ。(今昔物語)

音便は院政時代を経て鎌倉時代に入つて益々多く、特に平家物語などの戦記文は、種々の音便をとり入れてその効果をあらはしてゐる。

林を焼い(キ)てかる時は、おほくのけだものを得るといへども、

(平家物語)

光盛こそ、さいのくせ者と組ん(ミ)で討つ(テ)て、參つ(リ)て候へ。(平家物語)

催馬樂
一條天皇の頃
源雅信が譜づ
けしたといふ。
今昔物語
後三條天皇の
頃の書といふ。

平家物語
鎌倉時代の作。

義經記
曾我物語
共に室町時代
の作。

僧都、舟にのつ(リ)てはおり、おりてはのつ(リ)つ。(平家物語)

櫓の柱に馬をつない(ギ)て、源氏をまちかけたり。(義經記)

馬のいきのきる、程ぞ追う(ヒ)たりける。(曾我物語)

夏の蟲、とん(ビ)で火に入る。(曾我物語)

今日の口語では、四段活用の動詞が、たたりたりに結びつく場合には、

咲き||て 咲いて。

咲き||た 咲いた。

咲き||たら 咲いたら。

咲き||たり 咲いたり。

のやうに、連用形のもとの形を用ひることが出来なくて、どうしても音便にしなければならぬ。これは音便としてその發達の極點に達したもので、今日ではむしろ音便といふ用語が不適當であるときへ考へられる。

〔動詞の活用形〕

動詞の活用形は、平安朝の中頃までは四段活用上一段活用下一段活用のほ

動詞の活用
形

かは、終止形と連體形とは形を異にしてゐたが、平安朝の末期から連體形を終止形にすることが多くなり、終止形は亡びるやうになつた。

簾ノ内ニ立テ聞ムトスル(ス)。夜ナレバ人無シ。(今昔物語)

たとひ、人われをころさむとする(ス)とも、われは人にうらみをなすべからず。あたをば恩にて報する(ズ)といふ事あり。(寶物集)

さて、頼光は其より歸りける(リ)。(古今著聞集)

天のあたへをとらざるは、かへつてとがをうる(ウ)といふ。(曾我物語)

鎌倉時代以後、落つ・受く・來・爲などの終止形は殆ど亡びて、連體形となつてゐる。殊に江戸時代以後は、落つる・受くる・寝るなど上二段下二段に活用する動詞は、落ちる・受ける・寝るとなつて、上一段下一段に變つた。現今九州の一方では、落つる・受くるなど古い形を用ひる所もあるが、それでも落つ・受くは亡びてゐる。

二 形容詞

寶物集
高倉天皇の頃
平康頼の作と
いふ。
古今著聞集
後深草天皇建
長六年、橘成
季作。

形容詞の活用形

〔形容詞の活用形〕

形容詞が未然連用終止連體已然の五つの活用形を完全に具へたのは平安朝に入つてからのこと、奈良朝時代には已然形がまだ十分に發達しなかつた。それで

衣こそ二重もよき。(日本書紀)

野を廣み草こそ繁き。(萬葉集)

のやうに、こそその係に對する結はきしきの連體形が用ひられた。

平安朝に入ると、これが殆ど止んで、けれしけれの已然形を以てこそに對する結とするやうになつた。

月見れば千々に物こそ悲しけれ。(古今集)

山里は秋こそ殊にわびしけれ。(古今集)

残りなくみせつくさむと思へばこそいとほしけれ。(源氏物語)

くきのあかうきらくしう見えたるこそいやしけれどもをかしけれ。(枕草紙)

萬葉集
淳仁天皇天平
寶字三年まで
の歌を集めて
ゐる。

古今集
醍醐天皇延喜
五年、紀貫之
等撰。

このけれしけれが助詞のどもに結びついた

よけれども。

かなしけれども。

は、

それはよい。けれども實行はむつかしい。

別れるのはかなしい。けれどもまた會ふことも出来る。

のやうに、けれどもといふ一つの接續詞として用ひられるやうになつた。

散ればこそいとゞ櫻はめでたけれ、けれども、けれども、さうぢやけれど

も。(鯛屋貞柳)

鯛屋貞柳
享保時代の狂
歌師。

〔形容詞の音便〕

形容詞の音便は平安朝になつてあらはれ、連用形をうとし、連體形をいとす
ることが行はれた。

三寸ばかりなる人、いとうつくしうくて居たり。(竹取物語)

聲はをかしうくてぞあはれにうたひける。(伊勢物語)

竹取物語
光孝天皇・宇
多天皇の頃の
書といふ。
伊勢物語

右はウ音便の例である。

にくいきことをひきいでむぞあやしき。(紫式部日記)

はかないきことも所がら折からなりけり。(紫式部日記)

右はイ音便の例である。

平安朝の頃には、形容詞のイ音便を連體語としては用ひたけれども、終止と
して用ひられたことは無かつたが、鎌倉時代以後は終止形の地位をも奪ふ
やうになり、室町時代・江戸時代を経て現今に至つていよゝゝ多く用ひられ
るやうになつた。

あゝあぶない。こなたは終に船に乗つた事がないと見えた。

(狂言記、薩摩守)

太郎冠者か、よそくしい。(狂言記、墨塗)

我はたゞ生れつきたる兩眼の外に目を三つほしい。(醒睡笑)

三 助動詞

醍醐天皇・村
上天皇の頃の
書といふ。
紫式部日記
一條天皇の頃
紫式部作。

狂言記
室町時代のもの。

醒睡笑
後水尾天皇元
和九年、安樂
庵策傳作。

助動詞と助詞とはその特殊なもの二三について述べることにする。

す・さす・しむ

「す・さす・しむ」

しむは使役の助動詞として奈良朝時代に最も盛に使用せられた。

あしびきの山行きしかば、山人のわれに得しめし山苞やまづとぞこれ。(萬葉集)
宿の梅の散りすぐるまで見しめすありける。(萬葉集)

しかし、この時代にはしむを尊敬の助動詞として用ひることはなかつたが、平安朝に入ると、

夜を日になして懲りしめたまふ。(竹取物語)

みふねすみやかにこがしめたまへ。(土佐日記)

のやうにしむは専ら尊敬の助動詞として使用するやうになり、使役の助動詞としては、しむの代りに新にすさすが起り、すさすは更に又敬意をあらはすにも用ひられるやうになつた。

宇津保物語
圓融天皇の頃の書といふ。

この七人の人に琴一つづつとらす。(宇津保物語)
つかさを得さすとも兄にはまさらむ。(落窪物語)

右はすさすが使役の助動詞として用ひられた例である。

いささかなる隙なくかきあひぬはせ給へば、(落窪物語)

御視おろしてかかせさせたまふ。(枕草紙)

右はすさすを尊敬の助動詞として用ひた例である。

鎌倉時代になると、すさすはやはり使役の助動詞として用ひられたけれども、すさすだけで尊敬の意をあらはすことは無くなつた。

室町時代から後は、これに受身の助動詞らるを加へた「させらる」を促音にして「さつしやる」として尊敬の意の助動詞又は動詞として用ひた。

茶代を忘れさつしやれた。(狂言記、薩摩守)

そんな事をさつしやるな。(浮世風呂)

今日文語文に多くしむが使用されるのは漢文訓讀の餘勢である。漢文の訓讀は奈良朝時代の語法を傳へたものであるからである。

浮世風呂

「すさす」

奈良朝時代の形容詞に已然形の無かつたやうに、べしはこの時代にはまだ

式亭三馬の作
光格天皇文化
五年前篇成る。

已然形は發達してゐなかつた。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
べし	べく	べく	べし	べき	○

従つてこそこの係に對する結は、連體形のべきを用ひたので、べけれといふ形は平安朝になつて生じたのである。

平安朝時代の音便はこのべしにもあらはれてゐる。即ち連用形のくをうとし、連體形のきをしとしたものである。

いひかへすべう(ク)もあらずあさまし(源氏物語)

はしたなくもあ(る)べい(キ)かな(源氏物語)

關東方言のべいはこのべしの音便である。

筑波山つくばつてさへでつかいに、突つ立つたら猶でつかかるべい。

(伊達政宗)

延喜前後の流行語としてべらといふのがある。

堤中納言物語
平安朝末期の書といふ。

伊達政宗
豊臣時代の武將。

めり

これは平安朝時代の特別の語法である。

〔めり〕

春のきるかすみの衣ぬきをうすみ、山風にこそみだるべらなれ(古今集)
見わたせば松のうれ毎にすむつるは、ちよのどちとぞおもふべらなる。
(土佐日記)

めりは奈良朝には殆どなく、平安朝に入つて連用終止連體已然の諸形にわたつて用例があり、頗る榮えたものである。

物をのみおぼすめりしかど(源氏物語)

あとのかたによりていふめり(枕草紙)

こがらしに吹きあはすめる笛の音を(源氏物語)

うぐひすだに見すぐしがたげにうちなげきてわたるめれば(源氏物語)

めりはこの以後の時代には亡びたものであるから、これも亦平安朝特別の語法の一である。

四 助詞

だに・すら
は

〔だに・すら・さへ〕

だに・すらは奈良朝・平安朝ともに存してゐたが、鎌倉時代以後にはだに・すらは消滅してさへでもがこれに代つた。

あの方から吹く風に當つてさへそのまゝ滅却すると仰せられた。

(狂言記、附子)

人でも連れて參らうものを。(狂言記、鬼養子)

同時にさへの位置にはまでが代つて用ひられるやうになつた。

明けわたる雲間の星の光まで、山のは寒し峰の白雪。(新勅撰集)

〔ぞ・なむ・こそ〕

係結の法則は平安時代に殆ど確定した。しかし、源平二氏の興亡から鎌倉時代となつて、時勢の推移につれて言語の變動の起つたことはめざましい

新勅撰集
後堀河天皇貞
永元年、藤原
定家撰。
ぞ・なむ・
こそ

もので、係結の法則もこの頃からおひ／＼崩れはじめて室町時代に至つて一層甚しくなつた。

係のなむは奈良朝には存在しなかつたが、平安朝に入つて盛に用ひられたことは當時の物語・隨筆等によつて知ることが出来る。しかし、これは鎌倉時代以後には擬古體のものを除いては全く消滅した。

附録 (二)

文法上許容スベキ事項

(明治三十八年十二月二日 文部省告示第百五十八號)

- 一「居リ」^二恨ム^二死ヌ^二ヲ四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ。
- 二「シク・シシキ」活用ノ終止言ヲ、「アシシ」^二イサマシシ^二ナド用キル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。
- 三過去ノ助動詞ノ「キ」ヲ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用キルモ妨ナシ。
(例) 火災ハ二時間ノ長キニ互リテ鎮火セザリシ。
金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ、金利ノ引弛ヲ見ザリシ。
- 四「コトナリ」^二異^二ヲ「コトナレリ」^二コトナリテ^二コトナリタリ^二ト用キルモ妨ナシ。
- 五「、セサス」トイフベキ場合ニ、「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。
(例) 手習サス。
周旋サス。

賣買サス。

六「、セラル」トイフベキ場合ニ、「、サル」ト用キル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

(例) 罪サル。

許サル。

解釋サル。

七「得シム」トイフ場合ニ、「得セシム」ト用キルモ妨ナシ。

(例) 最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム。

上下貴賤ノ別ナク、各其地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ。

八佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シシカ」ニ連ネテ、「暮シシ時」^二過シシカバ^二ナドイフベキ場合ヲ、「暮セシ時」^二過セシカバ^二ナドトスルモ妨ナシ。

(例) 唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ。

攻撃開始ヨリ陥落マデ、僅ニ五箇月ヲ費セシノミ。

九てにをはノ「ハ」動詞助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ。

(例) 花ヲ見ルノ記。

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ。

10 疑ノてにをはノ「ヤ」ハ、動詞・形容詞・助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ。

(例) 有ルヤ。

面白キヤ。

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ。

11 二てにをはノ「ト」モ「ノ」動詞・使役ノ助動詞・及受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

(例) 數百年ヲ經ルトモ。

如何ニ批評セラルルトモ。

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ。

12 三てにをはノ「ト」ノ、動詞・使役ノ助動詞・受身ノ助動詞・及、時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

(例) 月出ヅルト見エテ。

嘲弄セラル、ト思ヒテ。

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ。

萬人皆其徳ヲ稱ヘケルトゾ。

13 三語句ヲ列舉スル場合ニ用キルてにをはノ「ト」ハ、誤解ヲ生ゼザルトキニ限り、最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ。

(例) 月下花。

宗教ト道德ノ關係。

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク。

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例。

史記ト漢書①ノ列傳ヲ讀ムベシ。

史記ト漢書ノ列傳①ヲ讀ムベシ。

14 上ニ疑ノ語アルトキニ、下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ。

(例) 誰ニヤ問ハシ。

幾何ナルヤ。

如何ナル故ニヤ。

如何ニスベキヤ。

一五 了にをはノ「モ」ハ、誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ、「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用キルモ妨ナシ。

(例) 何等ノ事由アルモ(アリトモ)、議場ニ入ルコトヲ許サズ。

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)、準備ハ未ダ成ラズ。

經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)、昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ。

誤解ヲ生ズベキ例。

請願書ハ會議ニ付スルモ(ストモ)、之ヲ朗讀セズ。

給金ハ低キモ(ケレドモ)、應募者ハ多カルベシ。

一六 「トイフ」「トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用キル習慣アル場合ハ、之ニ從フモ妨ナシ。

(例) イハユル哺乳獸ナルモノ。

顔回ナルモノアリ。

三 助動詞の活用表

時	尊敬		使役		可能		受身		種類		
	了	完									
り	たり	ぬ	つ	しむ	さす	す	らる	る	らる	る	本形
(ら)	たら	な	(て)	しめ	させ	せ	られ	れ	られ	れ	未然形
(り)	たり	に	て	しめ	させ	せ	られ	れ	られ	れ	連用形
り	たり	ぬ	つ	(しむ)	(さす)	(す)	らる	る	らる	る	終止形
る	たる	ぬる	つる	(しむる)	(さする)	(する)	らるる	るる	らるる	るる	連體形
(れ)	たれ	ぬれ	つれ	(しむれ)	(さすれ)	(すれ)	らるれ	るれ	らるれ	るれ	已然形
		ね	(てよ)	(しめよ)	(させよ)	(せよ)			らるれよ	るれよ	命令形
	た			ます	させる	せる	られる	れる	られる	れる	本形
	たら			ませ	させ	せ	られ	れ	られ	れ	未然形
	たり			まし	させ	せ	られ	れ	られ	れ	連用形
	た			ます	させる	せる	られる	れる	られる	れる	終止形
	た			ます	させる	せる	られる	れる	られる	れる	連體形
	たら			ますれ	させれ	せれ	られれ	れれ	られれ	れれ	假定形
				ませ	させよ	せよ			られよ	れよ	命令形

文

語

口

語

三助動詞の活用表

打消	推量										時				尊敬				使役			可能		受身		種類						
	ざり	ず	べかり	べし	めり	けむ	らむ	まし	らし	む	む	けり	き	り	たり	ぬ	つ	しむ	さす	す	らる	る	しむ	さす	す		らる	る	らる	る	らる	る
	ざり	ず	べかり	べし	めり	けむ	らむ	まし	らし	む	む	けり	き	り	たり	ぬ	つ	しむ	さす	す	らる	る	しむ	さす	す	らる	る	らる	る	らる	る	本形
	ざら	ず	べから	べく				(ませ)				(けら)	(せ)	(ら)	たら	な	(て)	しめ	させ	せ	られ	れ	しめ	させ	せ	られ	れ	られ	れ	られ	れ	未然形
	ざり	ず	べかり	べく	(めり)									(り)	たり	に	て	しめ	させ	せ	られ	れ	しめ	させ	せ	られ	れ	られ	れ	られ	れ	連用形
	(ざり)	ず	(べかり)	べし	めり	けむ	らむ	まし	らし	む	む	けり	き	り	たり	ぬ	つ	(しむ)	(さす)	(す)	らる	る	しむ	さす	す	らる	る	らる	る	らる	る	終止形
	(ざる)	ぬ	(べかる)	べき	める	けむ	らむ	まし	(らし)	む	む	ける	し	る	たる	ぬる	つる	(しむる)	(さする)	(する)	らるる	るる	しむる	さする	する	らるる	るる	らるる	るる	らるる	るる	連體形
	ざれ	ね	(べかれ)	べけれ	めれ	けめ	らめ	まし	(らし)	め	め	けれ	しか		たれ	ぬれ	つれ			(すれ)	られ	れよ	しむれ	さすれ	すれ	られ	れよ			られ	れよ	已然形
	ざれ															ね	(てよ)			(せよ)	られ	れよ					命令形					
	ない	ぬ						らしい	よう	よう	よう	た		た				ます	られる	れる			させる	せる	られる	れる	られる	れる	本形			
												たら		たら				ませ	られ	れ			させ	せ	られ	れ	られ	れ	未然形			
	なく	ず						らしく				たり		たり				まし	られ	れ			させ	せ	られ	れ	られ	れ	連用形			
	ない	ぬ						らしい	よう	よう	よう	た		た				ます	られる	れる			させる	せる	られる	れる	られる	れる	終止形			
	ない	ぬ						らしい	よう	よう	よう	た		た				ます	られる	れる			させる	せる	られる	れる	られる	れる	連體形			
	なけれ	ね										たら		たら				ますれ	られ	れ			させれ	せれ	られ	れ	られ	れ	假定形			
																		ませ					させよ	せよ			られ	れよ	命令形			

文

語

口

語

〔注意〕括弧を施したものは現代文では殆ど用ひない。

比較	希望		詠歎		指定		打消			推量					時				尊敬		使役		可能		受身												
															來未	去過	了	完	す	る	しむ	さす	す	らる	る	らる	る										
ごとし	まほし	たし	けり	なり	たり	なり	まじ	じ	ざり	ず	べかり	べし	めり	けむ	らむ	まし	らし	む	む	けり	き	り	たり	ぬ	つ	しむ	さす	す	らる	る	しむ	さす	す	らる	る	らる	る
ごとく	まほしく	たく			たら	なら	まじく		ざら	ず	べから	べく				(ませ)				(けら)	(せ)	(ら)	たら	な	(て)	しめ	させ	せ	られ	れ	しめ	させ	せ	られ	れ	られ	れ
ごとく	まほしく	たく			たり	なり	まじく		ざり	ず	べかり	べく	(めり)							(り)	(り)	たり	に	て	しめ	させ	せ	られ	れ	しめ	させ	せ	られ	れ	られ	れ	
ごとし	まほし	たし	けり	なり	たり	なり	まじ	じ	(ざり)	ず	(べかり)	べし	めり	けむ	らむ	まし	らし	む	む	けり	き	り	たり	ぬ	つ	(しむ)	(さす)	(す)	らる	る	しむ	さす	す	らる	る	らる	る
ごとき	まほしき	たき	ける	なる	たる	なる	まじき	(じ)	ざる	ぬ	(べかる)	べき	める	けむ	らむ	まし	(らし)	む	む	ける	し	る	たる	ぬる	つる	(しむる)	(さする)	(する)	らるる	るる	しむる	さする	する	らるる	るる	らるる	るる
	まほしけれ	たけれ	けれ	なれ	たれ	なれ	まじけれ	(じ)	ざれ	ね	(べかれ)	べけれ	めれ	けめ	らめ	まし	(らし)	め	め	けれ	しか	(れ)	たれ	ぬれ	つれ	(しむれ)	(さすれ)	(すれ)	らるれ	るれ	しむれ	さすれ	すれ	らるれ	るれ	らるれ	るれ
					たれ	なれ		ざれ																													
やうだ	たい				である	です	まい	ない	ぬ							らしい	よう	よう	た			た				ます	られる	れる	させる	せる	られる	れる	られる	れる	られる	れる	
やうだら					であら	でせ													たら			たら				ませ	られ	れ	させ	せ	られ	れ	られ	れ	られ	れ	
やうだつ	たく				であり	でし		なく	す							らしく			たり			たり				まし	られ	れ	させ	せ	られ	れ	られ	れ	られ	れ	
やうだ	たい				である	です	まい	ない	ぬ							らしい	よう	よう	た			た				ます	られる	れる	させる	せる	られる	れる	られる	れる	られる	れる	
やうな	たい				である			ない	ぬ							らしい	よう	よう	た			た				ます	られる	れる	させる	せる	られる	れる	られる	れる	られる	れる	
やうなら	たけれ				であれ			なけれ	ね									たら			たら					ますれ	られれ	れれ	させれ	せれ	られれ	れれ	られれ	れれ	られれ	れれ	

未読	未読	未読	未読	未読	未読	未読	未読
未読	未読	未読	未読	未読	未読	未読	未読
未読	未読	未読	未読	未読	未読	未読	未読
未読	未読	未読	未読	未読	未読	未読	未読
未読	未読	未読	未読	未読	未読	未読	未読
未読	未読	未読	未読	未読	未読	未読	未読
未読	未読	未読	未読	未読	未読	未読	未読
未読	未読	未読	未読	未読	未読	未読	未読

【説明】 世内の形勢をたずねて見たが、この形勢である。

比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較
比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較
比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較
比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較
比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較
比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較
比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較
比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較
比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較	比 較

【説明】 本報に掲載したものは、地元の新聞である。

四動詞と助動詞との接続表

文		語	
未然形に	る ナ変 ラ変	未然形に	う れる 四段
連用形に	たり カ変・サ 変は例外	連用形に	たい ます
終止形に	らむ まし なり (詠歎)	終止形に	らしい
連體形に	ごとし (指定)	連體形に	(の)だ (の)です やうだ やうです
已然形に	り 四段	已然形に	
未然形に	らる 四段 ナ変 ラ変 以外	未然形に	よ う れる 四段
連用形に	けり カ変・サ 変は例外	連用形に	さ せる 四段 以外
終止形に	べし べかり めり なり (詠歎)	終止形に	まい ない ぬ
連體形に	に體連は變ラ	連體形に	
未然形に	む しむ す ざり じ まし まほし り サ變	未然形に	
連用形に	たし けむ けり	連用形に	
終止形に	たし けむ けり	終止形に	
連體形に	たし けむ けり	連體形に	

〔注意〕 指定の助動詞たりは體言だけに接続する。

昭和二十二年十月二十九日
文部省檢定
 中國語文教科用

著者權所有



昭和十二年五月十五日 發行
 昭和十二年十月十日 訂正再版印刷
 昭和十二年十月十五日 訂正再版發行

著者

八波則吉

發行 印刷者兼 東京市神田區錦町二丁目七番地
 印 佃 要 三 郎

發行所

東京市神田區錦町二丁目七番地
 振替東京七九五七七番
 大阪市東區博勞町五丁目
 振替大阪九八二〇番

英進社

代價中等日本文法 (上級用)
 定價六十錢

中華民國二十二年十月二十日
美商...
中國...

...



...

...

...

...

...

...



広島大学図書

2000064973

